

平野山古窯跡群第12地点遺跡 発掘調査報告書

1992

山形県
山形県教育委員会

ひら の やま

平野山古窯跡群第12地点遺跡 発 掘 調 査 報 告 書

平成4年3月

山 形 県
山形県教育委員会

序

本書は、平成3年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した平野山古窯跡群第12地点遺跡の調査成果をまとめたものです。

平野山古窯跡群は山形県のほぼ中央部に位置する寒河江市にあります。寒河江市は西に朝日・月山、葉山の高山を背負い、南・東・北を最上川と寒河江川の両河川に囲まれた地で、最上川により形成された肥沃な大地が広がり、「さくらんぼの里」として有名な所です。

調査では、重り合った2基の須恵器窯跡と、これに付随する工房跡と考えられる6軒の竪穴住居跡などが発見されました。窯跡底面に残された土器は、これまで平野山古窯跡群で出土したものの中では最も古く、奈良時代後半まで遡るものと考えられ、全体的には奈良～平安時代の生産集落跡であることが明らかとなりました。また本遺跡は丘陵末端部に立地しており、その等高線には平行して等間隔で並ぶ縄文時代の陥穴列が見つかったことは、周知の外でもあり、縄文時代の狩猟場としての発見は注目されるところです。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存あります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

- 1 本書は山形県土木部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成3年度に実施した「国道287号道路改良事業」にかかる、「平野山古窯跡群第12地点遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所存地は、山形県寒河江市大字柴橋字高松・木ノ沢及び西村山郡大江町大字左沢字木ノ沢である。
- 3 発掘調査は、平成3年4月15日から同年7月26日まで、延べ67日間に亘って行った。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体	山形県教育委員会
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者	事務局長補佐 佐々木洋治（調査担当）
調査班長	渋谷孝雄
主任調査員	須賀井新人
調査員	黒坂広美
事務局事務局長	土門紹徳
事務局長補佐	田苗健太郎（庶務担当）
庶務班長	野尻侃
主任事務員	新関絃子・賣間秀男・永井健郎・渋江正義
- 5 調査においては、山形県土木部道路整備課、寒河江建設事務所道路計画課、寒河江市教育委員会、大江町教育委員会、西村山教育事務所など関係機関、並びに地元寒河江市・大江町の方々の御協力を得た。
- 6 本書の作成・執筆は須賀井新人・黒坂広美が担当し、挿図・図版・表の作成には小笠原朋秋・黒田紀代江・鈴木澄子・三沢友子・市川則子・平泉美和子・山内知恵子の補助を得た。編集は安部実・須賀井が担当し、全体を佐々木洋治が総括した。
- 7 考古地磁気年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託したものである。
- 8 調査記録及び出土遺物については、山形県教育委員会で一括保管している。
- 9 現地調査と報告書の作成に当たって、川崎利夫（天童市立天童中部小学校）、宇野修平（山形県立谷地高等学校）、大宮富善（寒河江市教育委員会）、小野忍（酒田市教育委員会）、平川南（国立歴史民俗博物館）の各氏より御指導と御助言を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S Q	……窓跡	S T	……竪穴住居跡	S K	……土壤・陥穴
S D	……溝跡	S G	……河川跡	S X	……性格不明遺構
E L	……カマド	E K	……住居跡内土壤	E P	……ピット
R P	……完形・一括土器	S	……礫		
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は、N-49°40'-Eを測る。
 - (3) 遺構実測図は1/40・1/45・1/60・1/400縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
 - (4) 遺構実測図第6～10図のスクリーントーンは焼土を示す。また、第12・13図のそれは焼壁土壤の被熱面を示す。
 - (5) 遺構計測表中の()内の数値は、検出部分の計測値を示している。
 - (6) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/4で採録し、各々スケールを付した。遺物図版について、図版15の14のみ1/2縮尺で他は全て1/4で採録した。なお、図版15の12の底部拡大部分は任意の縮尺である。
 - (7) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
 - (8) 土器実測図・拓影図の断面では、網点を入れたものが土師器、白ヌキは須恵器、●が赤焼土器を、砂目を入れたものは繩文土器を表している。
 - (9) 遺物観察表中の()内の数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。また、出土地点欄の層位では、Fは遺構覆土内出土、ローマ数字Ⅲは遺跡を覆う土層（基本層序）を表している。
 - (10) 遺構覆土の色調については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の概要	
1 立地と自然環境	4
2 歴史的環境	4
III 検出遺構	
1 遺構の分布	6
2 窯跡	6
3 穫穴住居跡	12
4 陥穴群	24
5 土 壤	27
6 河川跡	29
IV 出土遺物	
1 窯跡・包含層出土遺物	30
2 土壌・河川跡出土遺物	30
3 穫穴住居跡出土遺物	32
4 E調査区出土遺物	39
V まとめと考察	
1 出土土器の検討	48
2 遺跡の性格と変遷	49
<引用・参考文献>	

表

表 1 陥穴計測表	26
表 2 出土遺物観察表(1)	45
表 3 出土遺物観察表(2)	46
表 4 出土遺物観察表(3)	47

挿 図

第1図	遺跡位置図	2
第2図	窯跡分布図	3
第3図	遺跡概要図	4
第4図	遺構配置図	5
第5図	S Q 1・2 窯跡	9
第6図	S T11竪穴住居跡	13
第7図	S T12竪穴住居跡	15
第8図	S T13竪穴住居跡	17
第9図	S T14竪穴住居跡	19
第10図	S T15竪穴住居跡	21
第11図	S K23・27・28・34・37・ 42・46・70陥穴	25
第12図	S K59・65土壤	27
第13図	S K51・54・56・67・68 土壤	28
第14図	F区河川跡土層断面	29
第15図	窯跡・包含層出土遺物	30
第16図	土壤・河川跡出土遺物	31
第17図	S T11住居跡出土土器	33
第18図	S T12・13住居跡出土土器	34
第19図	S T14住居跡出土土器	36
第20図	S T14・15住居跡出土土器	37
第21図	S T15・16住居跡出土土器	38
第22図	E区出土土器(1)	41
第23図	E区出土土器(2)	42
第24図	E区出土土器(3)	43
第25図	E区出土遺物	44

図 版

図版1	遺跡遠景 史蹟標柱 遺跡近景 重機械表土削離
図版2	C区遺構検出状況 C区遺構完掘状況
図版3	A区遺構完掘状況 B区遺構検出 状況 D区東半部遺構完掘状況 E区遺構検出状況 D区西半部遺 構完掘状況 F区河川跡掘り下げ 状況 C区調査風景
図版4	S Q 1・2 窯跡
図版5	S Q 1・2・3 窯跡
図版6	S T11竪穴住居跡
図版7	S T12竪穴住居跡
図版8	S T13竪穴住居跡
図版9	S T14竪穴住居跡
図版10	S T15竪穴住居跡
図版11	S T15・16竪穴住居跡
図版12	S K52・54・56・59土壤
図版13	S K46・67・68土壤、陥穴群
図版14	S K26土層断面 S K26完掘状況 S K71完掘状況 C区陥穴群完掘 状況 B区落込み土層断面 F区 河川跡土層断面
図版15	出土遺物(1)
図版16	出土遺物(2)
図版17	出土遺物(3)
図版18	出土遺物(4)
図版19	出土遺物(5)
図版20	出土遺物(6)
図版21	出土遺物(7)
図版22	出土遺物(8)
図版23	出土遺物(9)
図版24	出土遺物(10)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

寒河江市の西部、平野山の東部斜面にはその中腹から裾にかけて、数々の窯跡が群を成して分布する。これを一括して「平野山古窯跡群」と呼称している。

平野山古窯跡の研究の歴史は古く、明治末年頃に地元の郷土史家が、第1地点において瓦の破片を発見したのが最初とされる。1924年に史蹟調査のため現地踏査した阿部正己（1879～1946）は、その後発表した報文の中で、国指定史跡として現在復元整備が進められている酒田市の「城輪柵跡」に当地で製造された瓦を、最上川の舟運を利用して供給したという大胆な考案を示した。この立論によって平野山古窯跡は広く周知されるようになったが、当時の最上川舟運の状況や、より近くに酒田市東部丘陵古窯跡群が存在することなどから、その説は成立し難いことが明らかになってきた。なお、1932年には史蹟として県の指定を受け、「史蹟祝部土器窯址」の碑文を刻んだ石碑が本遺跡内（第12地点）に建立されている。

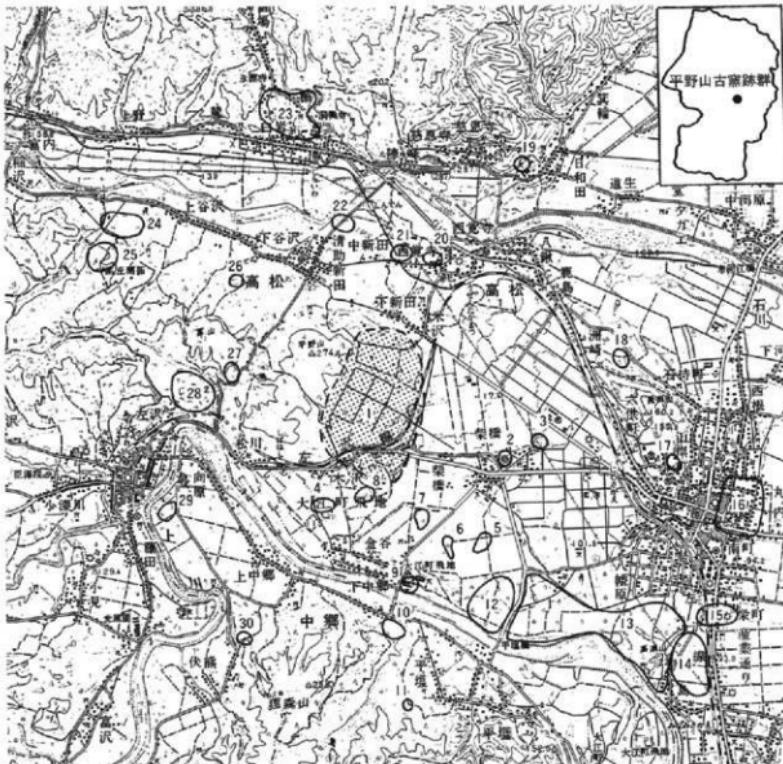
その後30年余途絶えていた研究史の上で、再び脚光を浴びるようになったのは1963年からである。この年、寒河江高校や山形大学の学生による表面踏査が行われ、平野山とその周辺には13ヶ所（第1～13地点）の須恵器ないし瓦の散布地が確認された。この内、第1地点を1965年に山形大学が、翌年には第3地点を寒河江市教育委員会が主体となり、発掘調査を実施した。両年度の調査の成果は、1970年に詳細な分析と検討を伴う報告書としてまとめられ、以後の研究の指針を導いた注目される1冊となったのである。さらに1983年、平野山農地造成工事に伴い、新発見の第14地点の緊急発掘調査が寒河江市教育委員会の手で行われ、出土した須恵器から10世紀後半～11世紀の年代が当てはめられる2基の登窯を検出している。

今回の調査は、国道287号道路改良事業に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。県教育委員会では、当事業との調整を踏るため昭和63年と平成元年に表面踏査を実施、遺物の散布状況等から遺跡範囲を確認した。平成2年4月には、計画路線内を手掘りによる試掘溝調査、さらに8月には重機を導入したトレーニング調査を行った。これにより把握できた遺構・遺物の分布状況等の資料を基礎として、発掘調査と工事の日程調整や調査方法の検討のため、県土木部、寒河江建設事務所、寒河江市教育委員会等の関係機関と協議を重ね、今回の緊急発掘調査へ至ったのである。

2 調査の方法と経過

調査は遺跡範囲にかかる道路用地内5,200m²を対象とした。用地外へ土捨場を確保できないなどの理由から、この区域内をA～F区の6地区（第3図）に分け、調査期を1期～3期とし、1期においてC・F区を、2期ではB・D区を、3期ではA・E区をそれぞれ実施する、2区並行調査で3期に分割する工程が最も効率的であると考えた。

調査工程第1期のC・F区は4月16～19日に重機で表土を除去した後、面整理を行って



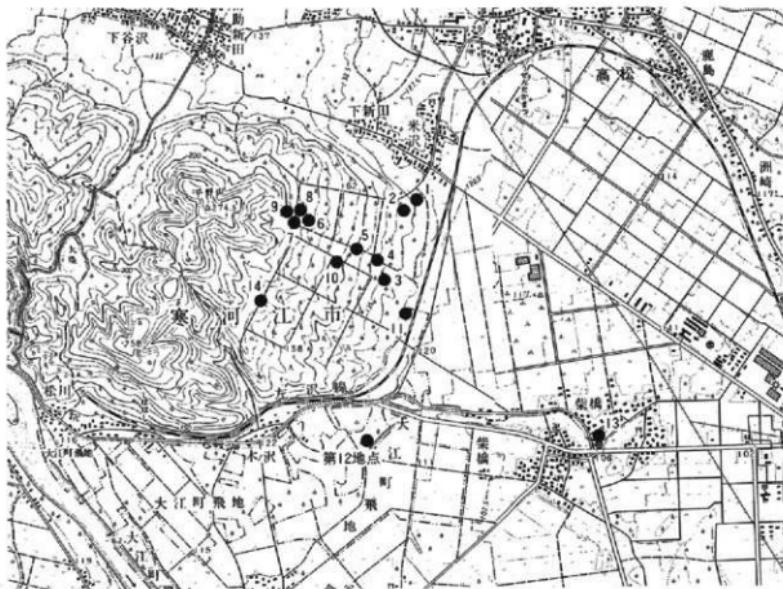
- | | | |
|-----------------------------|----------------------|--------------------|
| 1 平野山古窯跡群
第1~12地点(奈良~平安) | 2 柴橋窯跡(平野山第13地点)(平安) | 3 柴橋蛇塚遺跡(縄文) |
| 4 金谷原遺跡(旧石器) | 5 高松I遺跡(縄文・平安) | 6 高松II遺跡(縄文) |
| 7 高松III遺跡(縄文~平安) | 8 高松IV遺跡(平安) | 9 柴橋遺跡(縄文) |
| 10 うぐいす沢遺跡(縄文) | 11 平塙経塚(雄倉~室町) | 12 落衣長者屋敷遺跡(平安~中世) |
| 13 高瀬山遺跡群(旧石器~中世) | 14 三条遺跡(縄文・弥生・平安) | 15 石田遺跡(縄文・弥生) |
| 16 寒河江城跡(室町) | 17 山岸遺跡(縄文) | 18 石持原遺跡(縄文) |
| 19 日和田遺跡(縄文) | 20 西覚寺遺跡(旧石器) | 21 富沢II遺跡(縄文) |
| 22 富沢I遺跡(縄文) | 23 白岩館跡(中世~近世) | 24 上谷沢遺跡(縄文) |
| 25 腰躍山遺跡(縄文) | 26 中谷沢遺跡(縄文) | 27 富山遺跡(旧石器) |
| 28 左沢城跡(南北朝~元和) | 29 向原遺跡(縄文) | 30 明神山遺跡(旧石器) |

第1図 遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)

遺構の検出に努めた。C区では北東斜面に重複した2基の窯跡と住居跡2軒の他、全く予想外のTピット列を検出、またF区では河川跡を検出した。遺構精査は4月22日よりTピットを、5月7日からは窯跡と住居跡の掘り下げを開始し、並行しながら河川跡を掘り下げた。同時に、実測図・写真撮影の記録作業を進め、C区については窯跡を除いて5月27日に調査を終了した。この間、第1回目の現地説明会を5月24日に実施している。

5月28日より第2期に移り、A・C区を廃土置き場としてB・D区と、3期で調査予定であったE区を併せて表土除去を行った。D区には住居跡3軒とC区より続くTピット列、B区では旧地形の鞍部を挟んで土壤とTピットを検出した。E区は段丘南東斜面に位置し、当初は地形的にも窯跡の存在が有力であったが、天地返しの攪乱部が調査区の半分を占め、出土遺物は多いものの部分的に遺存した窯壁の一部を検出したに止まった。遺構精査はD区を中心に並行して進め、第3期でA区の廃土置き場となるB区の調査を6月21日に終了した。第3期のA区は6月24日から表土除去を行い面整理事業の後、遺構が希薄で遺物もほとんど無いことから7月11日までに精査を終えた。C区窯跡、D区住居跡、F区河川跡の記録作業と、E区の堆積層掘り下げについてはこの間順次行い、7月19日には2回目の現地説明会を開催、同26日に全ての調査を終え器材を撤収した。

なお、C・D区にかかる農道部分180m²については、8月2日に立会い調査を実施したものであり、S T16はこの調査によって検出した。また、窯跡の考古地磁気年代測定を委託して5月28日に実施している。



第2図 窯跡分布図 (S = 1 : 25,000)

II 遺跡の概要

1 立地と自然環境（第1～3図）

平野山は山形盆地の西縁、寒河江市街地から西へ約3kmの地点にあり、出羽丘陵より盆地内に舌状に張り出す小丘陵である。標高274mを測る平野山の北縁を寒河江川が、南縁を最上川が伴に東へ向かって流れる。この両河川に挟まれることから、平野山の周辺には段丘群が発達している。平野山の東部斜面は緩やかに傾斜しているが、東西方向に幾筋かの沢が形成されているため、浸食を受け起伏のある地形を呈する。古窯跡群が平野山東斜面の中腹から巻にかけて分布するのは、この地形的要因を利用したからである。平野山一帯の現在の地目は、りんご・桃・ブドウ・桜桃などの果樹園地帯であるが、開拓以前は松などの雑木林であったと言われる。また平野山の表層地質は、礫層の上に強粘質の灰白ないし赤粘土層が至る所で豊富に堆積しており、加えて数筋の小さな沢は流路として雨水や地下水を東流させる様子が窺われる。このように、傾斜（東部斜面）、燃料（松樹）、陶土原料（粘土）、水（小沢）という窯を構築する際の自然的条件の具備こそが、平野山古窯跡群を成立させた要因と言えよう。

第12地点遺跡は、JR左沢線柴橋駅の東方1.2km、標高112～118mの丘陵に立地している。平野山古窯跡群の最南端に位置し、平野山の東南麓というよりは、第13地点と併に最上川によって形成された河岸段丘上にあると言える。平野山の東斜面を高位段丘とするならば、本遺跡は中位段丘に立地し、さらにその下に広がる低位段丘との接続面に当たる段丘崖を利用して登窯が構築されている。

2 歴史的環境（第1図）

平野山周辺には河岸段丘が発達していることはすでに前述した。これら段丘群のより高燥な場所には、旧石器時代から中世室町時代までの長期に亘り、数多くの遺跡が点在あるいは連続と並ぶ。旧石器時代では、ナイフ型石器で著名な金谷原遺跡、県下最古の前期旧石器群が出土した明神山遺跡の他、平野山西山麓に位置する富山遺跡や寒河江川右岸には西覚寺遺跡がある。縄文時代では、長岡山の南東丘陵端に立地する山岸遺跡と戦前から多くの石器が出土したことで知られる石持原遺跡が前期に相当する。中期としては最上川河畔の低位段丘に立地する柴橋遺跡、うぐいす沢遺跡、向原遺跡が、また寒河江川沿いに上谷沢遺跡や日和田遺跡がある。富沢I遺跡は、寒河江川の低位と中位の段丘に跨る縄文時代後期と平安時代の複合遺跡である。寒河江駅南方700mに位置する石田遺跡は、西村郡で最も典型的な縄文晩期遺跡で、土偶が多く出土したことでも知られ、弥生土器も採取されている。弥生時代では、桜井式土器が數片出土し弥生後期に位置付けされる三条遺跡が掲げられる。近年の発掘調査で古墳時代～奈良・平安時代の集落跡の一部が確認された高瀬山遺跡群は、旧石器から中世鎌倉に及ぶ県内最大規模を誇る大複合遺跡である。

このように、平野山周辺に広がる標高120～160mを測る寒河江段丘上は、一帯に亘って古代の遺跡地帯であり、遠古の人々の有力な生活舞台であったことが窺われる所以である。

第3図 造跡概要図 ($S = 1 : 2,000$)



III 検出遺構

1 遺構の分布（第3・4図）

今回の調査で検出した遺構は窯跡3基、堅穴住居跡6軒、土壙30基、陥穴32基、溝状遺構3条、河川跡1条、ピット11基などである。B区には現況地形では確認できない沢状の鞍部が南北に走っており、その西側で段丘が発達している。調査全区において遺構は分布しているが、集中するのは中位河岸段丘の突端部に当たるC・D区であり、遺構の分布状況にはこのような地形的要因が多分に影響していると思われる。

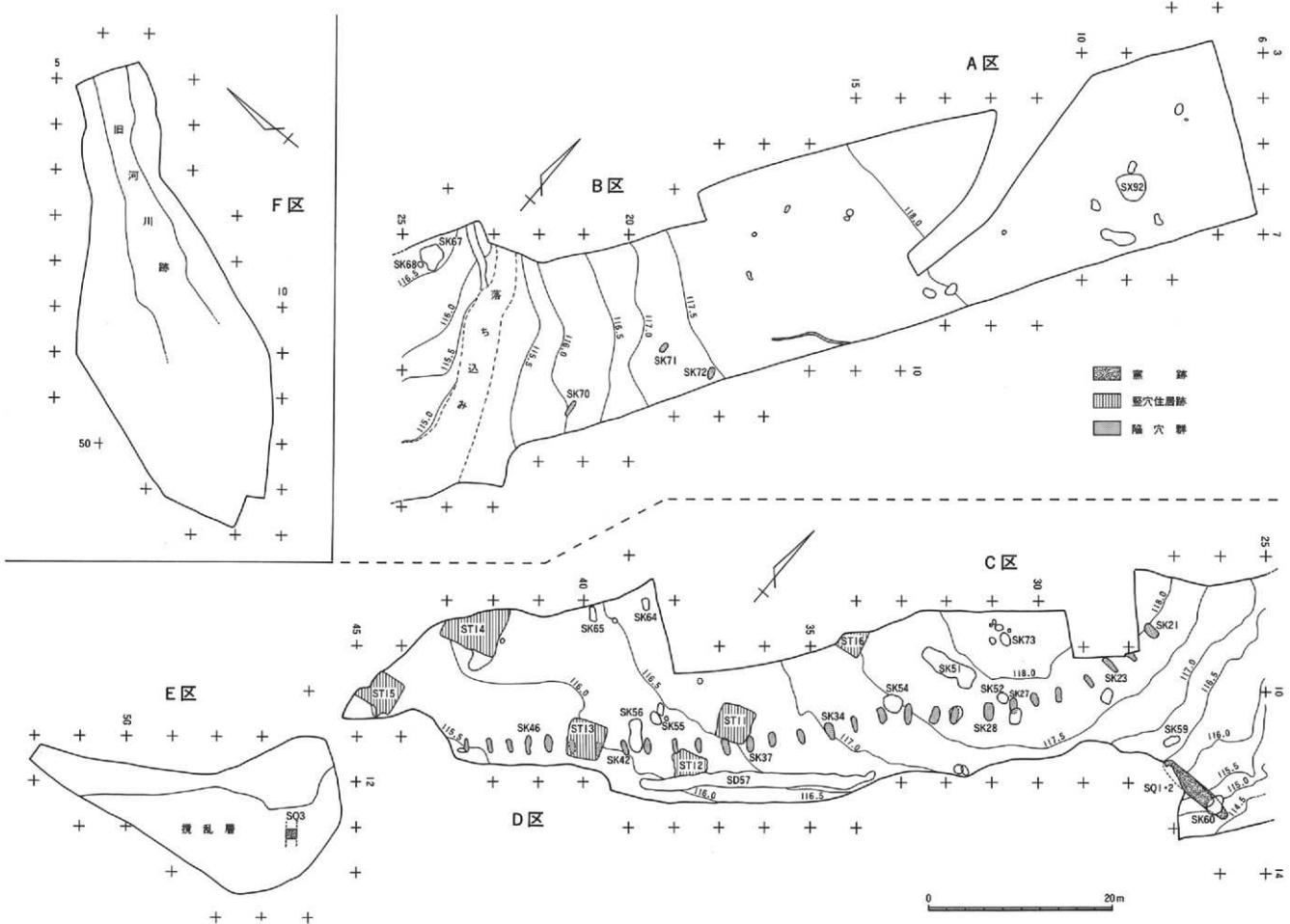
窯跡は、調査C～E区の南向斜面での検出が期待されたが、C・D区の斜面帯はすでに土取りが行われており、当時の傾斜地形は残っていない。このため、検出できたのは土取りから免れたC区北東端斜面に位置する重複した2基だけである。窯業の工房跡とも考えられる堅穴住居跡は、C・D区の段丘上平場に6軒が分布する。いずれもほぼ同一方向の主軸を持ち、住居跡同士の切合いはない。土壙とピットはA～D区の広い範囲で分布するが、遺物を包含するそれらはB区敷部以西の段丘面沿いのものに限られる。河川跡はF区の中央を縦断する形で南北方向に走る。F区ではこの河川跡以外に遺構の分布が見られない。唯一縄文時代の所産と考えられる32基の陥穴は、鞍部を挟みC・D区で列を成して分布する一群とB区に配された一群に分かれる。

E区は比高2mを測る傾斜地で、窯跡の存在が有力視された斜面帯であったが、調査区下半部は天地返しによる搅乱を受け遺構の存在が確認できなかった。窯壁と考えられるプランの一部が検出できたためこれをSQ3とした外は、遺構覆土と思われる炭化物や灰を混入した黒色土が所々で認められるものの、プランとしては捉えられず地山や白色粘土とのモザイク状を成す。地元の説によるとこの白色粘土は、土藏の白壁等に用いることからかなり探掘したとの話であり、トレンチ調査の結果、良好な粘土層を追うような掘り下げ方で検出面下1.1mまで探掘した跡が見受けられた。E区では遺物の分布についても層序的な天地返しが指摘され、異時期の土器が混在したり層位的に逆転して出土する状況であった。遺物量が須恵器を主体にして整理箱で39箱と全体の36%を占めるほど多いこと、蓋・壊類に歪みを有する物や重なって接合した状態の土器があこと、さらに地形的に適度な傾斜を持つ斜面帯であるなどの要因を考え合わせれば、何基かの窯跡が存在していた様子は想像に難くない。また、遺構の有無とは別に斜面一体に遺物が散布する状況から、窯業に関連した土器ステラであった可能性も推察される。いずれにせよE区では、窯跡の施設の一部を検出したのみであり、遺構の正確な分布状況は把握できない。

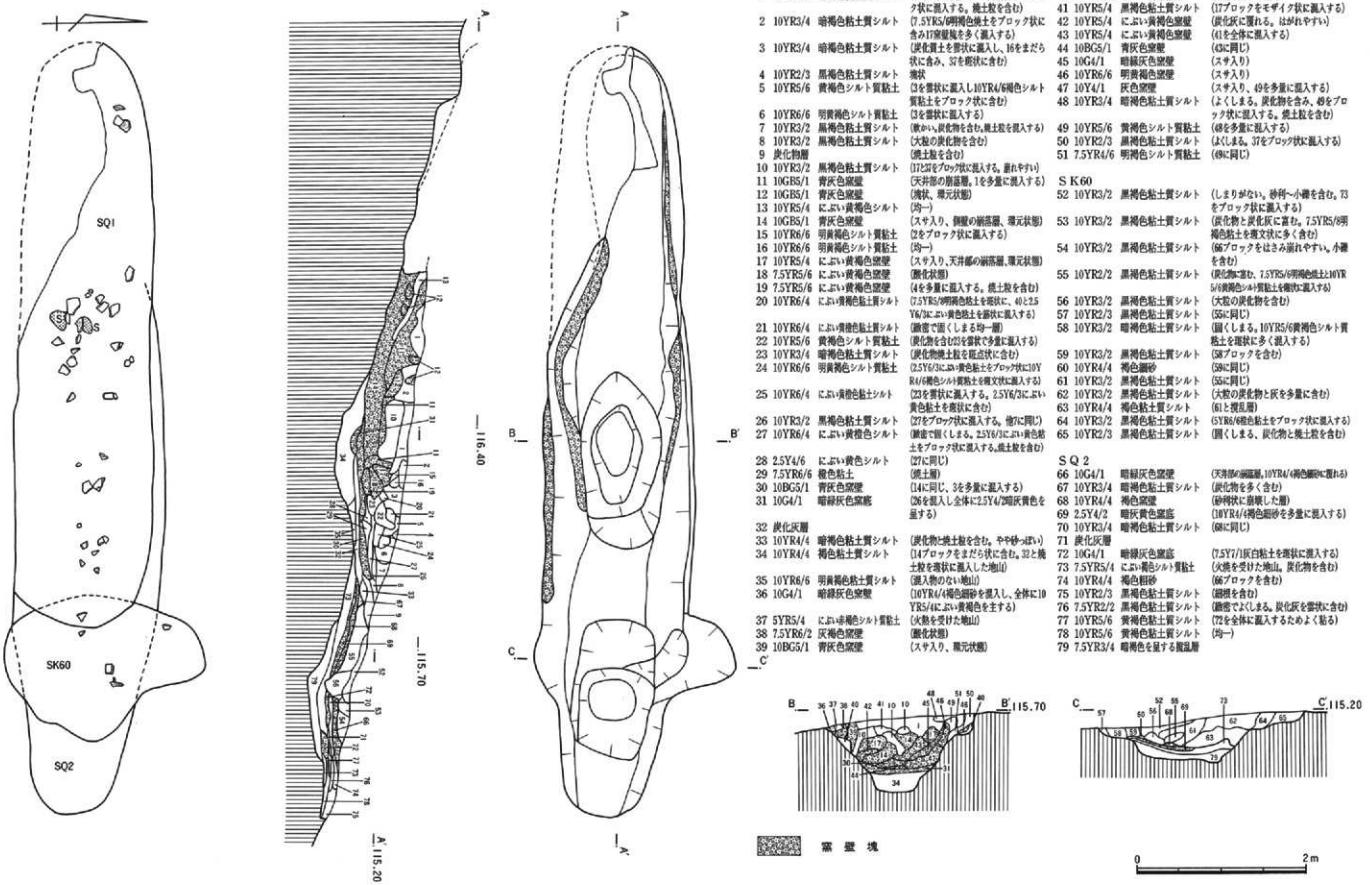
2 窯跡

SQ1・2窯跡（第5図、図版4・5）

C区丘陵部東向斜面で主軸をほぼ同じに測り、傾斜上下方向にややずれて重複する須恵器登窯である。2基の窯跡はSK60土壙とも切り合うため3時期の重複が認められ、新旧関係は断面観察の結果SQ2→SK60→SQ1となる。



第4図 遺構配置図



第5図 SQ I・2 窟跡

S Q 1 窯跡は、S Q 2 窯跡の焼成部以上と重複し、S Q 2 を斜面上位にスライドした形で構築された登窯である。焼成部と焼成部の境、及び焼成部床面には併に段のない、いわゆる半地下式無階無段の登窯である。焼成部及び煙道の左半部を削平され、また窓の天井部は崩落しているが、側壁・床面とも比較的良好に形状を留めている。平面プランは縦断面の立上がり端からの現存長7m、最大幅1.7mを測り、焚口・焼成部・焼成部とともに幅はほとんど変化しない細長の砲弾形を呈する。主軸方位はN-89°-Wである。焚口はS Q 2 の焼成部上位に位置し、焼成部へ繋がる様に炭灰の堆積層が認められる。焼成部床面は、一段低く皿状に掘り込まれており、1.2m×0.6mの楕円形状を呈する船底ピットがある。船底ピットは熱効率を高めるための焼成部施設で、これより上方が焼成部となる。したがって、焼成部から焼成部への移行点付近では窓底床面の勾配が変わることから、これを傾斜変換点とみることができる。焼成部から煙道へ至る床面の勾配は約20°を測る。側壁は、S Q 2 の側壁を一部利用しており、火熱を受けて堅く焼けた表面にスサ入りの粘土を貼り付け、整形している。窓体内には天井窓壁が崩落しているが、アーチ状になる天井を架構したと考えられる。遺物は、焼成部や焼成部の床面より32点出土したが、製品として放置された物はない。甕や壺の偏平な胴部破片が多く、20cm程の縫と結合した損品もあることから、焼台として使用したことが窺われる。

S Q 2 窯跡は、その大部分をS K 60 土壌およびS Q 1 によって切られ、全様については不明であるが、S K 60 は検出面からの深さ35cm前後であるため、窓底は焼成部付近まで壊されずに残る。S K 60 はS Q 1 とも切り合う形となるが、位置関係から推察すればS Q 1 の前庭部として捉えることもできる。S Q 2 の検出長は、切り合わず現存する北側窓壁部で6.1mを測り、推定される全長はS Q 1 同様約7mに及ぶものと考えられる。窓は斜面を掘り込んだ後、内面にスサを混入した粘土で整形された半地下式の登窯である。平面プランは、焼成部中央で最大幅を測る胴張りの形態を呈している。焼成部は幅1m、長さ1.6mで、焼成部下場の床面よりも10~15cm深く掘り込んだ船底ピットを有する。焼成部側壁は、スサ入り粘土が約5cmの厚さで貼り付けられているが、火熱による変化で内側から環元状態と酸化状態を呈する面に分かれ、これらが2層に亘って確認された。非常に堅緻であるが、貼り付け表面では容易に剥落し、最低1回は改修が行われた形跡を示す。焼成部床面の勾配は約11°と、かなり緩やかである。

S Q 1 とS Q 2 とに構造上の差異は認められず、出土した遺物からみても四半世紀以上の開きは見られない。したがって、時代差は十数年程度と考えられる。2基の窓跡における「考古地磁気年代推定」の報告書（藤根 久、鈴バレオ・ラボ）では、S Q 1 窯跡焼成部の窓底被膜層とS Q 2 窯跡焼成部の窓底焼土を試料に、「段階交流消磁気および熱残留磁化測定」を行っている。その結果、いずれの試料も「熱残留磁化強度」が極めて強く、かなり高温で焼成されていることを示しており、年代推定に適した試料であると言う。推定結果では、S Q 1 窯跡が790±20年、S Q 2 窯跡は780±25年という接近した年代値が与えられており、考古年代と調和する年代値が得られた、と結んでいる。

3 積穴住居跡

S T11積穴住居跡（第6図、図版6）

C調査区11・12-36・37グリッドに位置する。東西3.70m、南北4.04mの規模をもち、平面プランは隅丸方形を呈する。主軸方位は磁北を基準としてN-24°-Wを測る。

壁の立ち上がりは南側が特に攪乱・削平を受け不明瞭だが、北壁では比較的急な立ち上がりを示す。確認面からの深さは2~16cmである。床面は貼床で固くしまる。南側が北側に比べ10cm前後低くなっている。凹凸が認められる。

柱穴は2基検出された。また住居内北壁際で住居跡に付属する掘り込み（E K I）を検出した。径90cm、深さ12cmを測り円形を呈する。貯蔵穴と考えられる。

カマドは北壁E K Iの東側に隣接して検出された。煙道部は検出されず、側壁粘土が一部残存しており、燃焼部底面に焼土が認められる。またカマドの両袖部手前にそれぞれ赤焼土器甕が伏位で埋設されている。甕を埋設した後側壁を構築している。

出土遺物は住居跡北側E K 1・カマド周辺に集中しており、出土層位はほぼ床面直上もしくはやや床面から浮いた状態である。須恵器蓋、赤焼土器甕が多く出土している。

S T12積穴住居跡（第7図、図版7）

C調査区11-37・38グリッドに位置する。南東部分をS D57に切られており、検出規模は東西3.55m、南北3.25mである。ほぼ隅丸方形のプランを呈すると思われる。主軸方位はN-73°-Eを測る。

遺構は西側が特に攪乱・削平を受け遺存状況は良好ではない。残存する壁の立ち上がりはやや急激で、確認面からの深さは3~15cmを測る。床は貼床をしているが凹凸が多く、北東コーナー部分の傾斜がきつくなっている。

柱穴6基、落ち込み2基が検出された。いずれも浅いものであるが、若干の遺物を出土している。またE P 3・4はS D57覆土下から検出された。

カマドは東壁やや北寄りに検出された。側壁粘土が若干残存するのみで、煙道部は未検出である。燃焼部底面に広く焼土・炭化物を混入する層が堆積する。

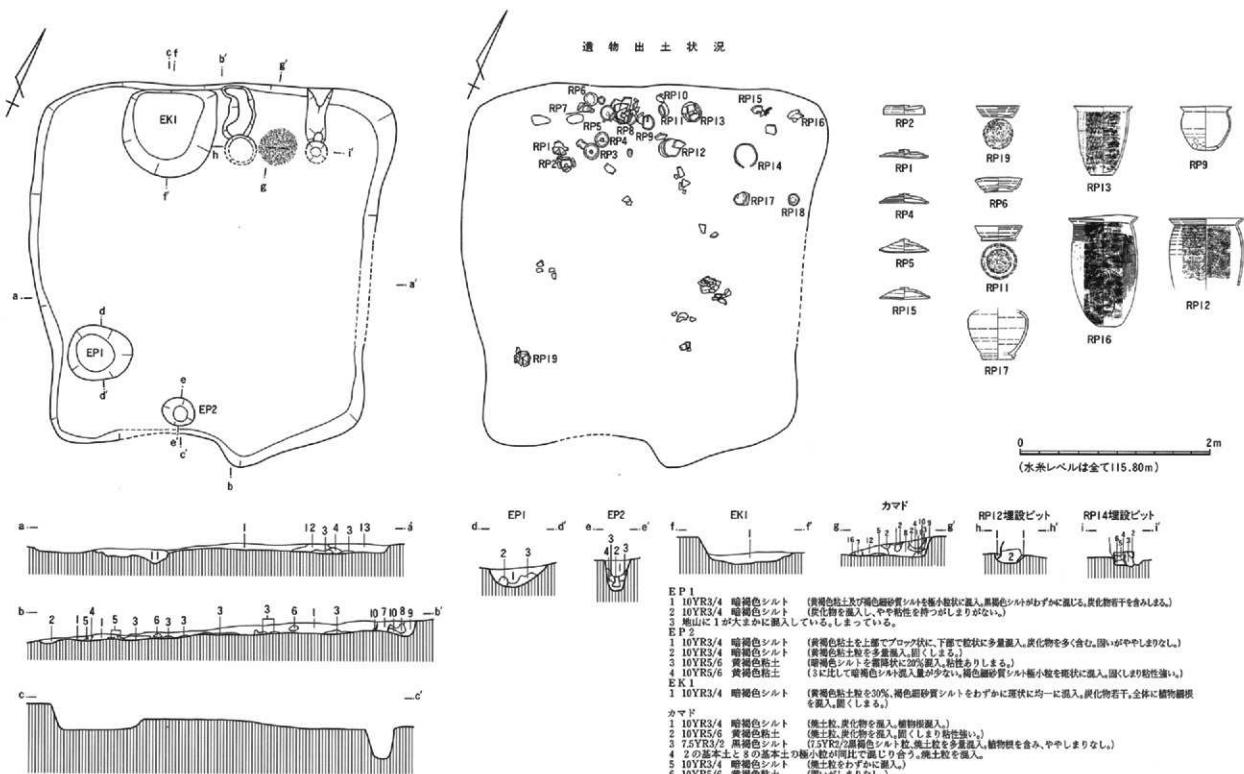
遺物はカマド部分から住居中央部にかけてやや集中して出土している。

S T13積穴住居跡（第8図、図版8）

D調査区10・11-39・40グリッドに位置する。東西4.06m、南北4.08mを測り、南側がややすぼむ隅丸方形を呈する。主軸方位はN-26°-Wを測る。

この住居跡はS K43・44の2基の繩文時代の陥穴の上に作られている。遺構上部は削平を受け遺存状況は良好ではないが、壁は緩やかな立ち上がりを示す。床面は貼床であるが、S K43・44の2基の陥穴の覆土上部には貼床は認められなかった。床面の起伏は少ないが、西辺周辺がやや低く、全体が西側に向かってやや傾斜している。また覆土の特徴として、ほぼ床面直上か床面に近い層位で黄褐色粘土塊の混入が認められた。

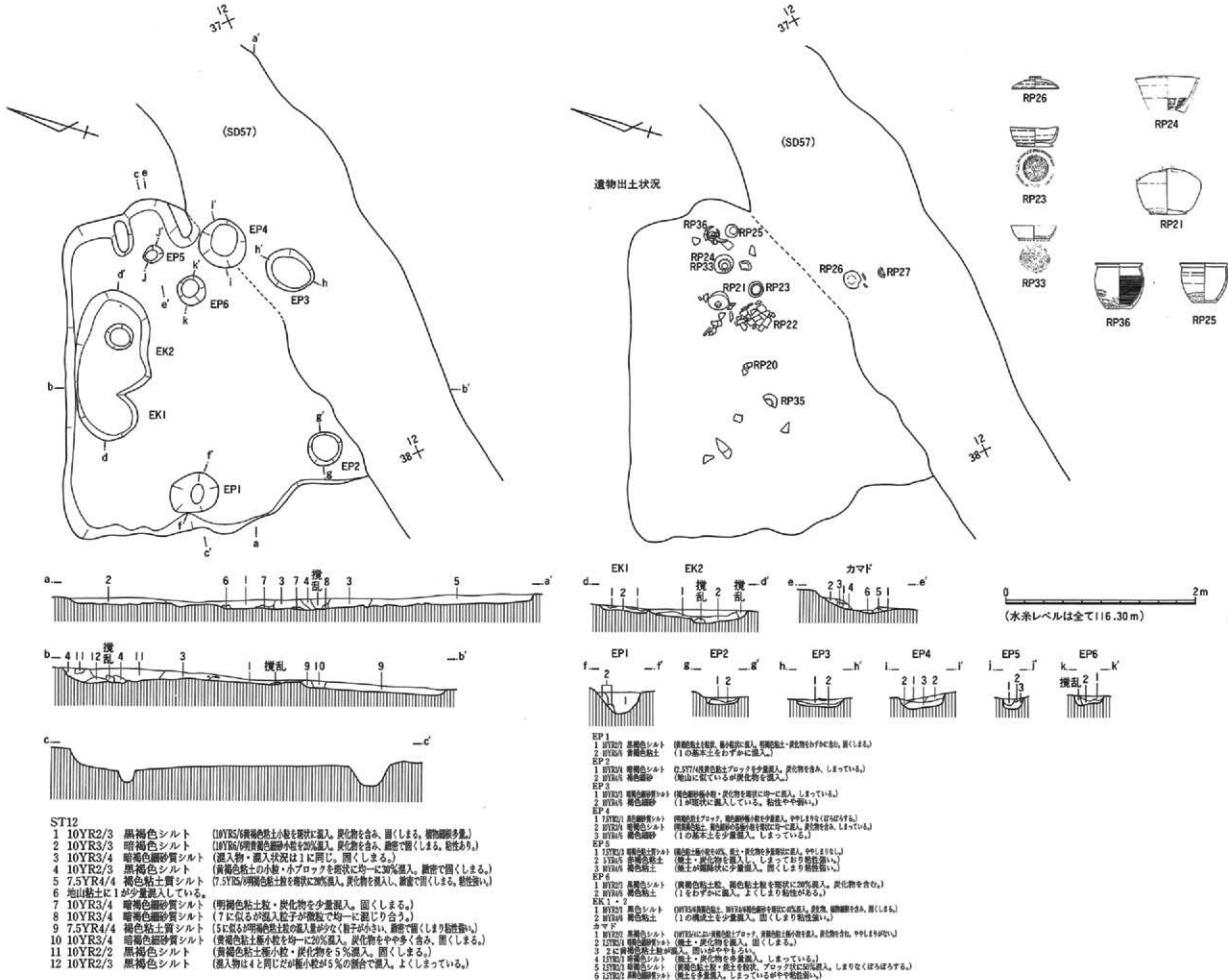
4基検出された柱穴のうち、E P 1はS K44覆土上で確認された。赤焼土器甕が伏位で埋設され、その西隣に焼土が検出された。また住居床面中央部にも焼土を確認したが、カ



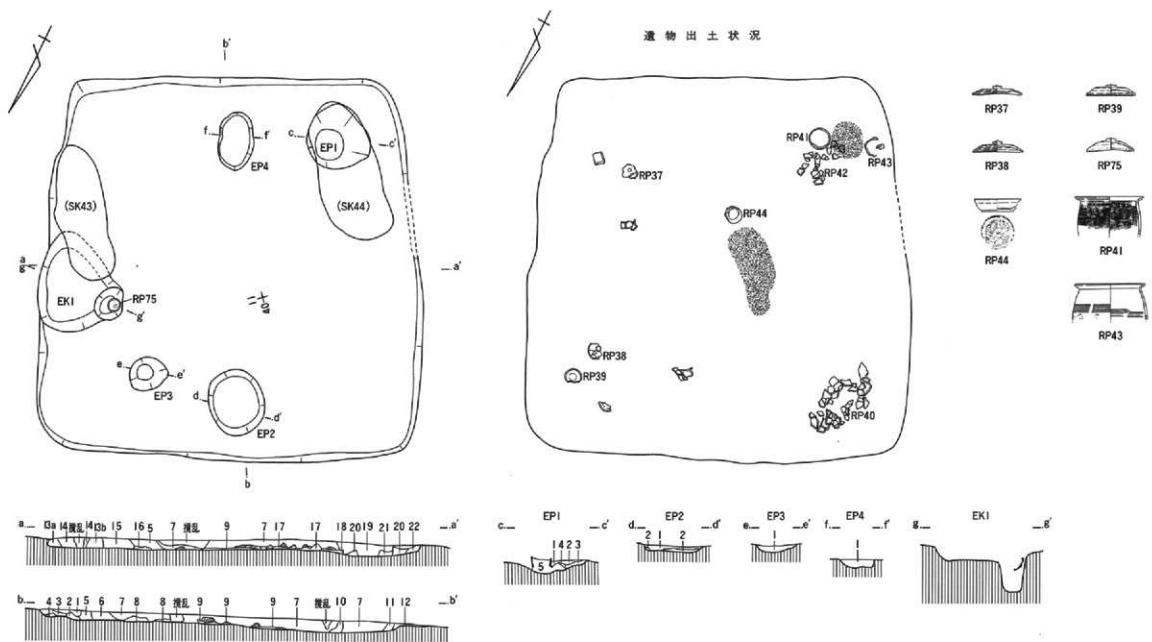
- S T II
 1 10YR2/3 黒褐色シルト (10YR5/6 黒褐色粘土 小粒を多く含む。固くしまっている。)
 2 10YR5/6 黄褐色粘土 (1の基本土を塊状に混入。炭化物を含む。固いがややちるい。)
 3 10YR2/3 黑褐色シルト (7.5YR5/6 同上。)
 4 10YR2/3 黑褐色シルト (7.5YR5/6 同上。)
 5 10YR5/6 黄褐色粘土 (1の基本土をブロック状に含み、固くしまっている。)
 6 10YR5/6 黄褐色粘土 (10YR2/3 黑褐色シルト 小粒を少量混入。固くしまる。)
 7 10YR2/3 黑褐色シルト (1の基本土が黒褐色粘土層中に混入。炭化物を含む。固くしまる。)
 8 10YR2/3 黑褐色シルト (1の基本土が黒褐色粘土層中に混入。炭化物を含む。固くしまる。)
 9 10YR3/4 黃褐色細砂シルト (10YR5/6 黑褐色粘土 小粒を多量混入。固くしまる。)
 10 10YR5/6 黄褐色粘土 (黄褐色粘土 小粒を少量混入。固いがやうい。)
 11 10YR2/2 黑褐色シルト (1に似るが黄褐色粘土の混入量がや多い。固くしまる。)
 12 10YR2/3 黑褐色シルト (1に似るが黄褐色粘土小粒を均一に多量混入。固くしまる。)
 13 10YR3/4 黑褐色シルト (黄褐色粘土小粒を均一に多量混入。炭化物をわずかに含み固くしまる。)

- E P 1
 1 10YR3/4 暗褐色シルト (黄褐色シルト及び褐色細砂質シルトを極小粒に混入。黒褐色シルトがわずかに混じる。炭化物削片を含む。)
 2 10YR3/4 暗褐色シルト (炭化物を含む。粘性あり。)
 3 10YR3/4 黄褐色シルト (1がまだまくに調製している。)
 E P 2
 1 10YR2/4 暗褐色シルト (黄褐色シルトを上部で2%混入。下部で砂状に多量混入。炭化物を多く含む。固いがややしまりなし。)
 2 10YR2/4 暗褐色シルト (1の砂状の粒を多量混入。固くしまる。)
 3 10YR2/4 黄褐色シルト (1の砂状の粒を多量混入。固くしまる。)
 4 10YR3/6 黄褐色粘土 (3に似て褐色シルトを多量混入。粘性あり。)
 E K I
 1 10YR3/4 暗褐色シルト (黄褐色粘土3%含む。褐色細砂質シルトを極小粒に混入。炭化物若干。全体に植物根根を含む。固くしまる。)
 カマド
 R P 12 墓設ビット
 R P 14 墓設ビット
 h-h' i-i'
 a-a' d-d' f-f' g-g' h-h' i-i'
 1 10YR3/4 暗褐色シルト (黒褐色シルト及び褐色細砂質シルトを極小粒に混入。黒褐色シルトがわずかに混じる。炭化物削片を含む。)
 2 10YR3/4 暗褐色シルト (黒褐色シルト及び褐色細砂質シルトを極小粒に混入。黒褐色シルトがわずかに混じる。)
 3 7.5YR3/2 黑褐色シルト (7.5YR2/2 黑褐色シルト。炭化物を含む。植物根を含む。)
 4 2の基本土上に3の基本土の塊小粒が同様に混じる。炭化物を含む。
 5 10YR3/4 暗褐色シルト (黒褐色シルトを含む。)
 6 10YR3/4 黄褐色粘土 (1に似るが黄褐色粘土を多量混入。炭化物を含む。)
 7 5YR2/2 黑褐色細砂シルト (上部に炭化物ブロックを多量混入。炭化物を含む。しまっている。)
 8 7.5YR3/4 暗褐色細砂シルト (黄褐色粘土と極小粒を混入して15%以上。黒褐色粘土、炭化物を含み、しまっている。やや粘性あり。)
 9 7.5YR3/2 黑褐色シルト (7.5YR2/2 黑褐色シルト。炭化物を含む。)
 10 7.5YR3/4 黑褐色細砂シルト (8に似るが黄褐色粘土を少量混入。)
 11 10YR5/6 黄褐色粘土 (8に似るが黄褐色粘土を少量混入。しまっており粘性強い。)
 12 5YR4/6 非堆積物質シルト (堆積物質を含む。)
 R P 13 墓設ビット
 1 10YR4/6 褐色細砂シルト (黒褐色シルト及び極小粒を多量混入。よくなじんでいる。)
 2 10YR2/4 暗褐色シルト (黒褐色シルト及び極小粒を多量混入。黒褐色シルトがわずかに混じる。しまりがなくぼぼぼする。)
 3 10YR4/4 暗褐色細砂シルト (黒褐色粘土、炭化物を含む。)
 1 7.5YR4/4 暗褐色細砂シルト (黒褐色粘土、炭化物を含む。)
 2 10YR2/4 黑褐色シルト (黒褐色粘土、炭化物を含む。)
 3 10YR4/4 黑褐色粘土 (黒褐色粘土、炭化物を含む。)
 4 10YR2/2 黑褐色細砂シルト (黒褐色粘土、炭化物を含む。)
 5 5YR4/6 褐色細砂シルト (黒褐色粘土、炭化物を含む。)
 6 7.5YR4/4 褐色細砂シルト (黒褐色粘土、炭化物を含む。)

第4図 STII 積穴住居跡



第7図 ST12整穴住居跡



- S T13
- 10YR2/1 黒褐色シルト (黄褐色地山砂粘小粒をわずかに混入。植物根混入。)
 - 10YR2/2 黒褐色シルト (褐色粘土を30%混入。粘性ありしまっている。)
 - 10YR2/3 黒褐色シルト (褐色粘土粒を斑状に混入。ややしまりなし。植物根混入。)
 - 10YR2/3 黑褐色粘土 (3の基本土を含む。粘性あり。)
 - 10YR2/3 黑褐色シルト (褐色化・褐色粘小粒を斑状に混入。植物根・炭化物を含み。しまっている。)
 - 10YR2/3 黒褐色シルト (2.5%4 黄褐色粘土粒をわずかに混入。植物根・炭化物を含み。しまっている。)
 - 10YR2/3 黒褐色シルト (褐色粘土粒を斑状に混入。炭化物を含み。しまっている。)
 - 10YR2/3 黑褐色シルト (褐色粘土が斑状・粒状に混入。炭化物を混入し、層状をなしている箇所あり。粘性強く。しまっている。)
 - 10YR2/3 黑褐色シルト (褐色粘土粒を斑状に混入。しまっている。表示より色調明るい。)
 - 10YR2/4 黑褐色シルト (褐色粘土粒を斑状に混入。表示より色調暗い。)
 - 10YR3/4 脳褐色シルト (11より細砂粘土量が5%と多く多い。固くしまっている。)
 - 10YR2/1 黑褐色シルト (黄褐色粘土粒を10%部程度に混入。炭化物・植物根を含み。しまっている。表示より明るい。)
 - 10YR2/2 黑褐色シルト (黄褐色粘土粒を5%混入。以下は3cmと同様。)
 - 10YR2/2 黑褐色シルト (黄褐色粘土粒をくわゞか合むがほぼ均等。やや粘性あり。しまっている。)
 - 10YR2/3 黑褐色シルト (褐色粘土を斑状・層状に少しある。植物根を混入し。しまっている。)
 - 10YR2/3 黑褐色粘土 (この基本土を含む。)
 - 10YR2/2 黑褐色粘土質シルト (特に上位に黄褐色粘土粒を混入。褐色粘土を斑状に混入し。粘性ありしまっている。)
 - 10YR4/4 黑褐色粘土 (17の基本土を斑状に30%混入。)
 - 10YR2/3 黑褐色シルト (褐色粘土粒をくわゞか合むが混入。しまっている。表示かい。)
 - 10YR3/3 黑褐色シルト (褐色粘土粒を10%部程度に混入。やや粘性あり。しまっている。)
 - 10YR2/3 黑褐色シルト (褐色粘土粒をわずかに混入。粘性あるが、ややしまりなし。植物根混入。)
 - 10YR3/3 黑褐色粘土質シルト (褐色粘土を斑状に混入。粘性あり、よくしまっている。)

- E P 1
- 7.5YR3/2 黑褐色シルト (地土・炭化物を混入。しまっているがやや軟かい。)
 - 5YR4/6 赤褐色細砂質シルト (地土。1の基本土を15%混入。しまっている。)
 - 7.5YR3/2 黑褐色シルト (地土をわずかに混入。やや軟かい。)
 - 10YR2/1 黄褐色粘土質シルト (ほぼ純粹。ややしまりなし。)
 - 10YR3/2 黑褐色シルト (1の基本土を混入。地山砂粘小粒もわずかに混入する。しまっている。)

E P 2

 - 10YR2/2 黑褐色シルト (10YR5/6 黄褐色粘土・粘土粒を30%斑状に混入。炭化物を含みしまりなし。)
 - 地山粘土に1の基本土がわずかに混入。しまっており粘性がある。

E P 3

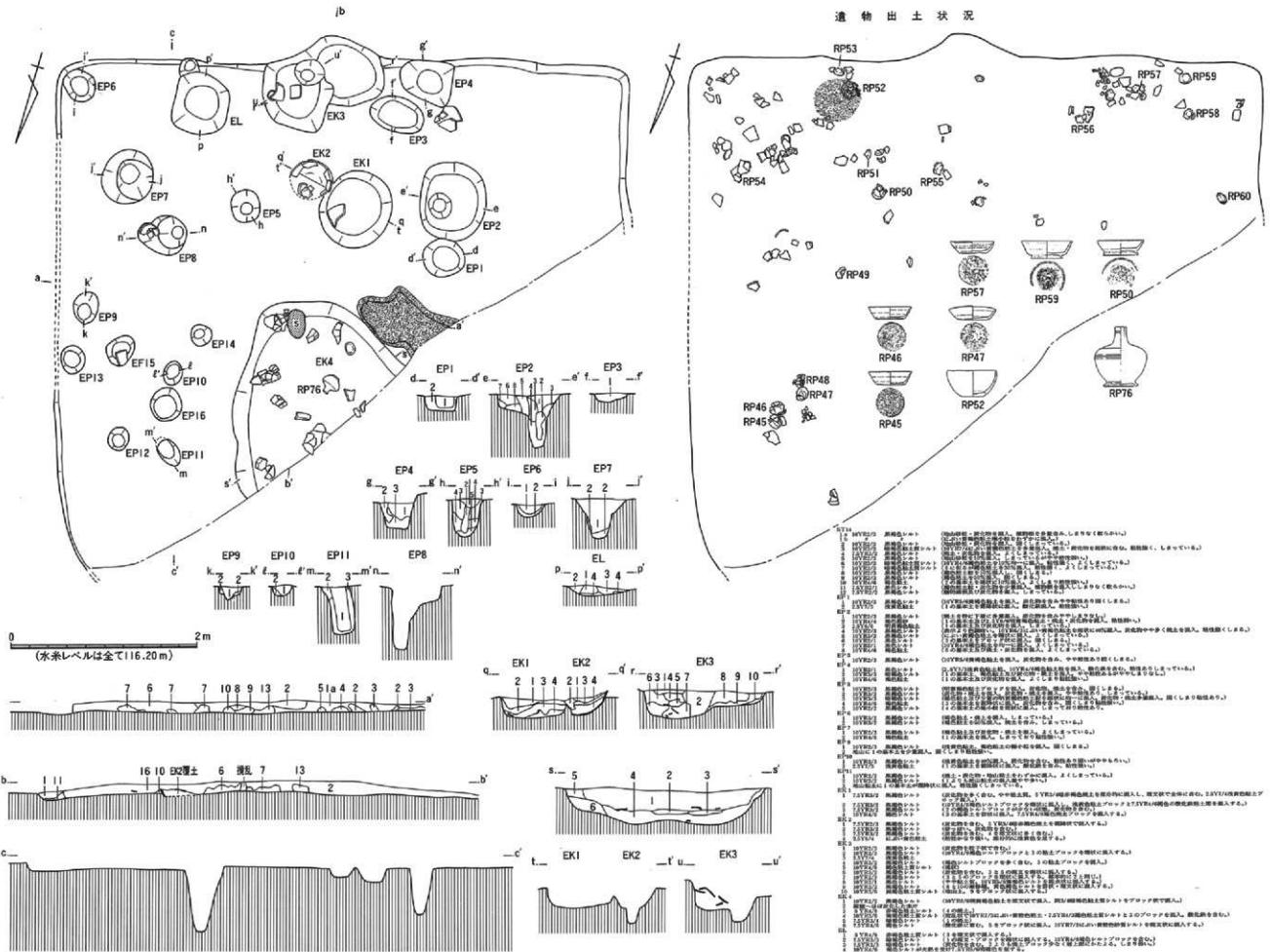
 - 10YR2/1 黑褐色シルト (黄褐色粘土は粘小粒を斑状に均一に微混流。炭火灰を含み、ややしまりなし。)

E P 4

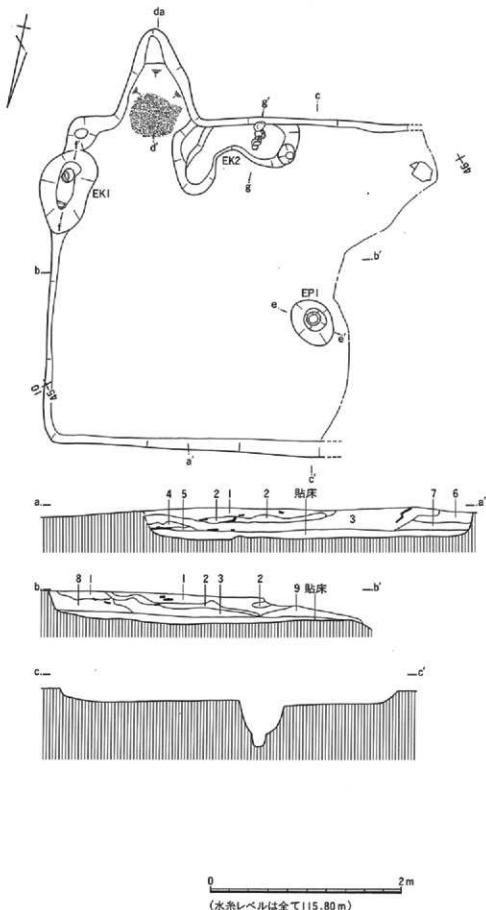
 - 10YR3/3 暗褐色細砂質シルト (10YR2/2 黑褐色シルト・10YR6/6 黄褐色粘土の極小粒を斑状に多量混入。炭化物・酸化鉄を混入。)

0 2 m
(水準レベルは全て116.0m)

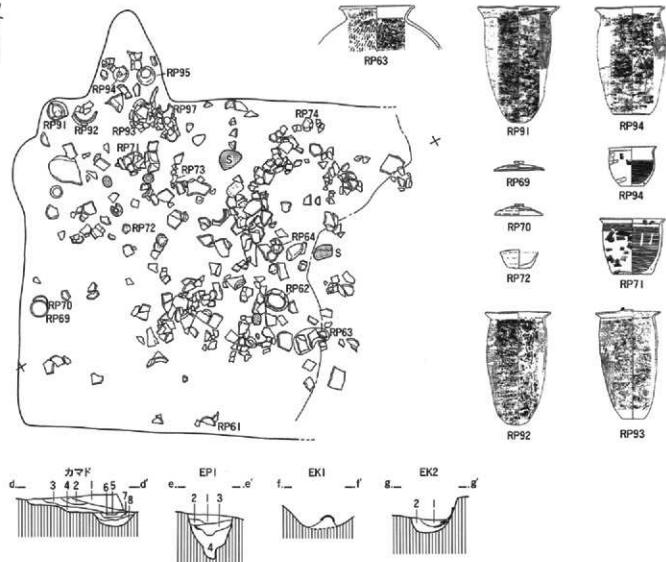
第8図 ST13豎穴住居跡



第9図 ST14竪穴住居跡



遺物出土状況



- ST15
1. 7.5YR2/1 時間色シート (固くしまる。黄化物を含む。2.5YR6/1に近い黄色粘土を表面付に投入する。)
 2. 7.5T2/1 黄褐色シート (2.5Y6/1に近い褐色の粘土を表面付に投入する。HGT2/1が時間色粘土をブロック状で部分的に投入する。)
 3. 10YR2/1 黄褐色シート (やや硬く堅く、黄化物を含む。にじみ黄色粘土ブロック。黄褐色粘土を部分的に含み、HGT2/1が時間色粘土シートを埋隙状に混入する。)
 4. 10YR2/2 黄褐色シート (4の基底土をブロック状に投入する。)
 5. 10YR2/3 黄褐色粘土シート (4を埋隙に投入し、5と一緒に黄褐色粘土を軟質で少々混入する。)
 6. 10YR2/4 黄褐色シート (1を埋隙に投入し、5と一緒に黄褐色粘土を軟質で少々混入する。)
 7. 10YR2/5 黄褐色シート (やや軟らかく、1を埋隙に投入する。黄化物を含む。5を軟質で少々混入する。)
 8. 10YR2/7 黄褐色シート (やや軟らかく、1を埋隙に投入する。黄化物を含む。5を軟質で少々混入する。)
 9. 10YR4/4 黄褐色粘土シート (黄褐色を含む。1を埋隙に投入し、HGT7/2Cは1が時間色粘土をブロック状で投入する。)
 - D1
 1. 10YR2/2 黄褐色シート (黄化物を含む。時間色粘土シートの裏面をやや混入する。)
 2. 10YR2/2 黄褐色シート (2.5YR6/1(黄褐色粘土上)を複数回投入する。)
 3. 10YR2/2 黄褐色シート (やや軟らかく、2を埋隙に投入する。)
 4. 10YR2/3 黄褐色粘土シート (5をブロック状に投入し、軟化物を含む。2.5YR6/1(黄褐色粘土上)と同様に黄褐色粘土シートをブロック状に混入する。)
 - E1
 1. 10YR2/2 黄褐色シート (黄褐色を含まないを投入し、HGT2/2は黒褐色シートを表面付に投入する。)
 2. 10YR2/4 黄褐色シート (同じく2.5YR6/1(黄褐色粘土上)を複数回投入する。)
 3. 10YR2/2 黄褐色シート (やや軟らかく、2を埋隙に投入する。)
 4. 10YR2/2 黄褐色粘土シート (やや軟らかく、2を埋隙に投入する。)
 5. 10YR2/1 (にじみ) 黄褐色粘土シート (カマド中央周辺のやや荒ざさられた隙間。)
 6. 10YR2/2 黄褐色粘土シート (やや軟らかく、2を埋隙に投入する。)
 7. 7.5R2/5 黄褐色粘土シート (ややシラフ質。)
 8. 10YR2/3 黄褐色粘土シート (ややシラフ質。HGT2/1は黒褐色シートを表面付に投入する。)
 - E2
 1. 10YR2/2 黄褐色シート (黄化物を含む。2をカマドに投入する。黒鉛鉱を含む。)
 2. 10YR2/4 黄褐色粘土シート (ややシラフ質。1を縫合付に投入する。)

第10図 ST15竪穴住居跡

マドは未検出である。

S T 14 穫穴住居跡（第9図、図版9）

D調査区8・9-41~43グリッドに位置する。北西側が未調査であるが、検出規模は東西6.23m、南北5.55mを測る。平面プランは隅丸方形と思われるが、他の住居跡に比べ大形である。主軸方位はN-17°-Wを測る。

壁は遺存状況の良い南壁コーナー付近ではやや急な立ち上がりを示すが、北東辺で壁の残存が無くプランそのものが不明瞭となっている。床面は固くしまり、比較的平坦である。またS T 13同様覆土内に粘土塊を混入する層が確認された。南西コーナー付近に床面直上約5cm程度の厚さで分布し、黒褐色土を基本に焼土・炭化物・遺物も混入する。

柱穴は16基検出された。そのうちE P 2・5・7・8・11は深さからみて本住居の構成要素と考えられる。またE K 1~4の4基の落ち込みを検出したが、そのうちE K 2は須恵器壺体部下半~底部破片を埋設してあり、壺内部からは粘土が検出された。土器製作用粘土の貯蔵、という用途を考えさせる遺構である。E K 4は全体が未検出であるが、径2.2m、深さ40cmの規模をもち、遺物の出土も多い。住居に伴う施設と考えられる。

カマドは検出されなかつたが、南壁際やや東寄りの床面に焼土の広がりを確認した。またE K 4に南接して床面上に焼土・炭化物を多量混入する厚さ約6cmの層を検出した。

住居跡からの出土遺物は須恵器破片が多く、床面上かやや浮いた状態で出土している。

S T 15 穫穴住居跡（第10図、図版10・11）

D調査区9・10-43・44グリッドに位置する。西壁部分が調査区末端部にあたる落ち込みのため削られているが、平面プランは隅丸方形を呈すると思われる。検出規模は東西3.70m、南北3.56mを測り、主軸方位はN-13°-Wである。

遺存状況は良好で、確認面からの深さは24~35cmある。壁の立ち上がりは急激で、床面は貼床で固くしまる。S T 13・14同様覆土内に黄褐色粘土塊の混入が確認された。

柱穴は1基のみ検出された。径50cmで底部に小穴をもつ。他にE K 1・2の2基の落ち込みが確認された。いずれも遺物を出土している。

カマドは南壁東側で検出された。燃焼部と煙道部からなり、側壁粘土は未検出である。煙道部底面は段を有し、燃焼部底面には焼土の堆積が認められる。

出土遺物は6軒中最も多量で、整理箱にして11箱を数える。住居内ほぼ全域より出土しており、須恵器壺破片が比較的多量である。廃棄されたものと考えられる。カマド内及びその周辺からは、土師器壺を含む6個体の一括土器が出土している。

S T 16 穫穴住居跡（図版11）

現況農道撤去に伴う立会調査時に検出された。8-33・34グリッドに位置する。遺構の南東部分にあたる東西2.80m、南北3.12mを検出した。遺構プラン確認面が住居跡の床面にほぼ等しく、上部は大部分とばされている。プランは方形もしくは長方形と思われる。残存する壁の立ち上がりは比較的急で、床面は貼床である。柱穴1基が検出されたがカマド・焼土等は未検出である。住居内からは赤焼土器壺の一括土器が出土している。

4 陥穴群（第11図、表1、図版13・14）

土壤のうち、底面にピットを有するものを「陥穴」として扱った。これらは32基検出されており、分布状況から配列を成す29基の一群（I類）とB区で検出した3基を一群（II類）と見成して、2大別される。ここでは、陥穴群（I・II類）の立地・配列・長軸方向、各陥穴の形態・規模・底部施設・用途等について検討する。

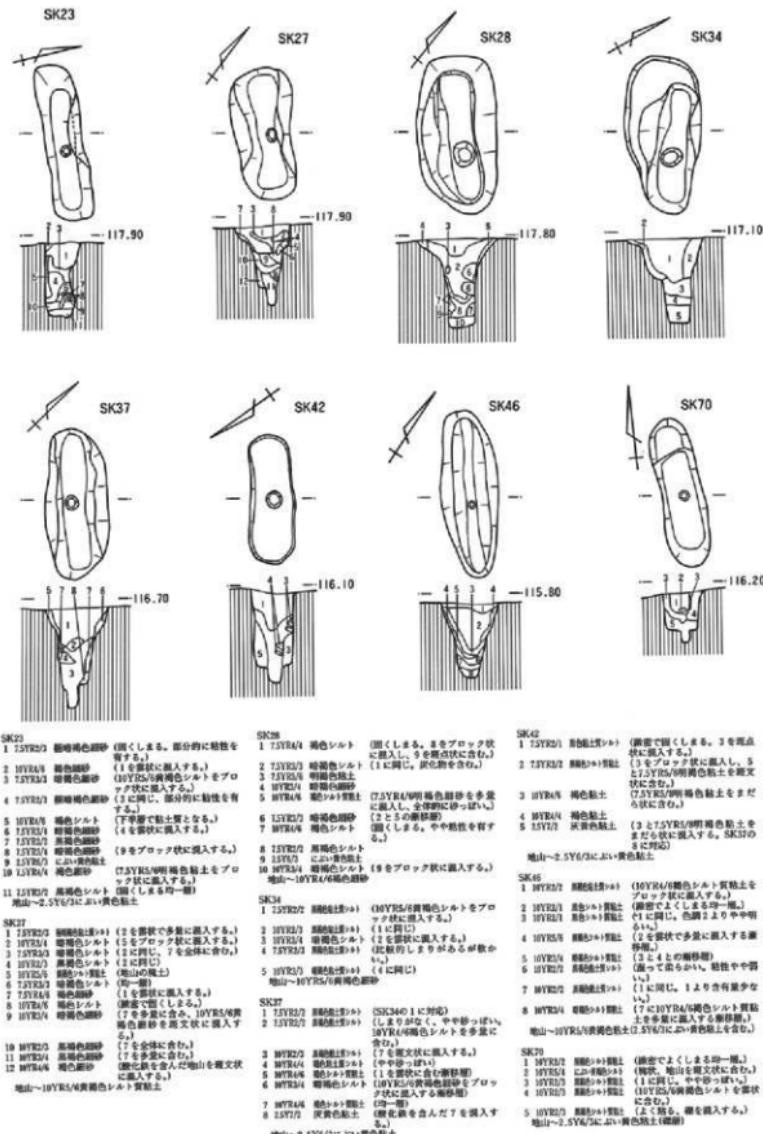
立地 従来「陥穴」は、丘陵地では緩斜面や尾根でおおく検出され、付近に谷地形や溝水のあることが条件とされる傾向が指摘されていた。中位段丘の縁辺部に立地する本遺跡の前面には、沖積地である低位段丘が広がるが、ここは開拓前まで湿地帯であったことが分かっている。さらに概述したように、I類とII類の間には沢状の鞍部が低位段丘に向かって走っている。I類・II類とも緩斜面への配置であり、以上の要素が備わるとなれば、地理的条件の整った場所での立地であると言える。また、陥穴が構築される丘陵地の性格として、獣を探るための狩猟場、採集域が当然のこととして考えられる。

配列 I類の29基は、丘陵（段丘）平坦部の縁辺において、ほぼ直線的だがS字状に緩く弧状を成して配列されている。弧状を描く配列の仕方には等高線の影響が考えられ、I類は等高線との関係によって2種に分けられる。すなわち、配列中心線が等高線に対して平行するSK21～30陥穴列（1種）と、等高線に対し直交ないし斜交するSK31～49陥穴列（2種）である。1種と2種の境は明瞭ではないが、等高線に沿った配置から谷部へ下る配置へ転換している。陥穴間の距離は1～3mであり、約75mの間に29基がほぼ等間隔に配されるという、極めて近接した配列であると言える。II類については、3基のみの検出であるため明確に配列を成すとは言い難いが、主軸方向が同じであるので、傾斜地形を利用した弧状配列を見成すことができる。

長軸方向 配列中心線及び等高線と、各陥穴の長軸方向との関連に着目する。I類では、各陥穴の長軸方向が配列中心線に対して全て直交する向きに構築されている。等高線との関係については、1種の長軸方向がそれと直交するのに対し、2種では平行ないし斜向する向き関係にある。II類においては、基数が少ないので関連は把握できないが、長軸方向が磁北に近いという点では共通性が指摘される。

形態 32基全てに共通していることは、底面中央部に円筒状のピット1穴を有する点である。ただ、SK22陥穴だけは西半部が調査区外にかかり、調査部では底面ピットが認められなかったが、未調査部にあると考えて間違いかどう。上端平面形は、梢円形や隅丸方形を呈するものが多い。壁の掘り方には、底面からほぼ垂直に立ち上がる（SK33・42・70）、途中に段を有し上端に向けやや開く（SK27・28・34・37・46）、一方向へオーバーハングする（SK23・31・40）などの形態が見られる。底面はほとんど平坦である。

規模 I類は上端平面プラン長さ135～218cm、幅46～101cmを測り、深さは70～113cmである。各値に開きが見られ、規模の大小は形態に関連していると思われる。II類はそれぞれ120～185cm、55～56cm、50～52cmを測り、I類に比べて小規模であるが、各陥穴の形態は類似する。特に深さは約50cmと均一なことから、ある一定の深さまで掘り込んだものと



第11図 SK23, 27, 28, 34, 37, 42, 46, 70階穴

表一 1 陥穴計測表

(単位: cm)

	上 端	中 段	下 端	深 さ	ビ ッ ト		長軸方向	備 考
					横	深さ		
SK21	181×101	147×48	150×37	93	20	32	N-87-W	上端平面形は梢円形。 土管半分は南西方へオーバーハング。
SK22	(114)×66	(102)×42	(94)×20	78	—	—	N-82'-W	西半管は断面外へ。 底面ピットは未検出。
SK23	191×48	166×30	147×26	88	14	31	N-88'-W	上端平面形は楕丸長方形。 北方側面は中段を有する。
SK24	147×48	134×45	125×29	80	17	31	N-74'-W	上端平面形は楕丸長方形。 壁面は急激に立ち上がる。
SK25	156×60	142×45	129×37	80	26	39	N-49'-W	上端平面形は不整楕丸長方形。 底面は南東方へ傾斜する。
SK26	135×80	124×54	121×48	84	20	40	N-60'-W	上端平面形は不整楕丸長方形。 北方へ一部オーバーハングする。
SK27	163×72	148×39	138×28	75	16	22	N-47'-W	上端平面形は楕丸長方形。 底面は中央部で斜い片側を呈する。
SK28	194×97	165×54	156×37	112	30	28	N-46'-W	上端平面形は楕丸長方形。 南西側面は中段をもつ。
SK29	188×92	143×32	136×30	113	26	19	N-25'-W	上端平面形は楕丸長方形。 上端部はSK30と境に切られる。
SK30	184×92	156×47	144×43	113	27	35	N-27'-W	上端平面形は楕丸長方形。 1管よりヨリフレイク1点出土。
SK31	218×82	186×47	175×33	94	22	34	N-41'-W	上端平面形は梢円形。 南西側面で一部オーバーハング。
SK32	174×91	148×50	148×40	91	21	29	N-52'-W	上端平面形は楕丸台形。 土管半分は南東方へオーバーハング。
SK33	157×66	142×35	132×27	106	23	35	N-56'-W	上端平面形は不整梢円形。 壁面の立ち上がりは急激。
SK34	193×95	161×54	140×35	104	28	42	N-71'-W	上端平面形は不整楕丸長方形。 上西側面部は平場をもつ。
SK35	157×60	132×39	120×33	93	22	32	N-60'-W	上端平面形は梢円形。 壁面は急激に立ち上がる。
SK36	154×79	150×73	135×33	95	21	30	N-47'-W	上端平面形は不整楕丸長方形。 南東側面で中段を有する。
SK37	183×78	180×54	166×32	101	18	30	N-47'-W	上端平面形は梢円形。 南東・南西側面で中段を有する。
SK38	177×74	170×47	151×36	91	17	28	N-57'-W	上端平面形は梢円形。 壁面北端は一部オーバーハング。
SK39	156×63	150×43	135×29	92	20	25	N-51'-W	上端平面形は梢円形。 断面が南東方へゆるやかに傾斜する。
SK40	154×47	141×32	131×33	88	20	27	N-52'-W	上端平面形は梢円形。 南西側面は一部オーバーハング。
SK41	165×77	144×57	134×31	73	15	24	N-43'-W	上端平面形は梢円形。 壁面は比較的ゆるやかに掘り込まれる。
SK42	159×55	156×53	153×50	94	20	17	N-60'-W	上端平面形は楕丸長方形。 壁面は完全向ほば垂直。
SK43	147×58	118×38	96×22	101	12	37	N-31'-W	上端平面形は梢円形。 ST13EP1に北跳を切られる。
SK44	152×68	140×45	145×25	106	14	32	N-48'-W	上端平面形は梢円形。 ST13と重複する。
SK45	176×73	156×62	144×39	103	14	40	N-44'-W	上端平面形は不整梢円形。 底面は中央部に抉い片側を呈する。
SK46	206×72	192×43	192×16	99	10	34	N-40'-W	上端平面形は梢円形。 壁面は途中で浅い段をもつ。
SK47	155×65	142×56	122×27	79	16	39	N-58'-W	上端平面形は梢円形。 底面はやや凸凹がある。
SK48	161×59	146×52	139×34	87	14	30	N-52'-W	上端平面形は楕丸長方形。 南東側面で中段をもつ。
SK49	153×46	136×31	126×24	70	11	26	N-42'-W	上端平面形は楕丸長方形。 底面形は中央でくびれた楕丸長方形。
SK70	185×56	145×42	120×38	59	11	21	N-7'-W	上端平面形は梢円形。 北端は平場をもつ階段状となる。
SK71	120×57	94×50	79×37	51	14	16	N-4'-W	上端平面形は楕丸長方形。 長軸方向はほぼ北北に沿う。
SK72	131×66	114×45	101×42	52	14	13	N-27'-W	上端平面形は楕丸長方形。 底面ピットは粘土層を掘り込む。

推測される。底面ピットは径10~30cm、深さ13~42cmである。

底部施設 底面ピットの存在は、陥穴の機能との密接な関係が考えられることから、施設と理解される。ピットのある陥穴の一般説として、棒状のものを立てるための掘り方か、直接打ち込んだことによる痕跡と考えられている。本遺跡の各陥穴のピットは、そのどちらであるか明らかではないが、掘り方と仮定した場合、ピットに規模の差が見られるのは、推測の域を出ないが、棒状のものを一本ずつ立てたものと、何本かと一緒に立てるという構築法の違いとも考えられる。

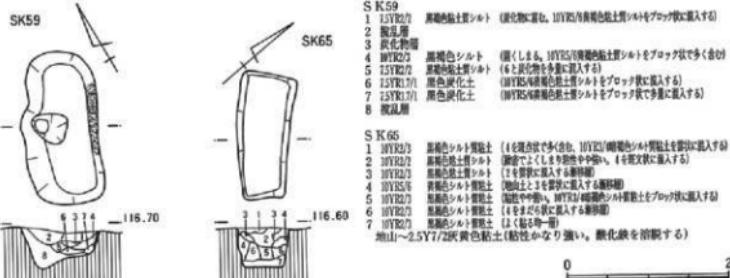
用途 本遺跡で検出された陥穴の用途としては、狩猟における「おとし穴」が妥当であろうと考える。その使用法については、偶然動物が落ちるのを待つものと動物を追いつめて追い落とすものの2通りが想定できる。I類の場合は明らかに、湿地に向かう「けもの道」に配列した陥穴であると判断され、II類においても同様の用途が考えられる。したがって、使用法としては前者の可能性が指摘できよう。またその機能は、底部に立てたとする棒の先を削って槍状にした「逆茂木」によって捕殺するという第一の目的の他、対象獣を落とし行動の自由を奪うことや骨折等を狙ったということも充分に考えられる。

5 土 壤

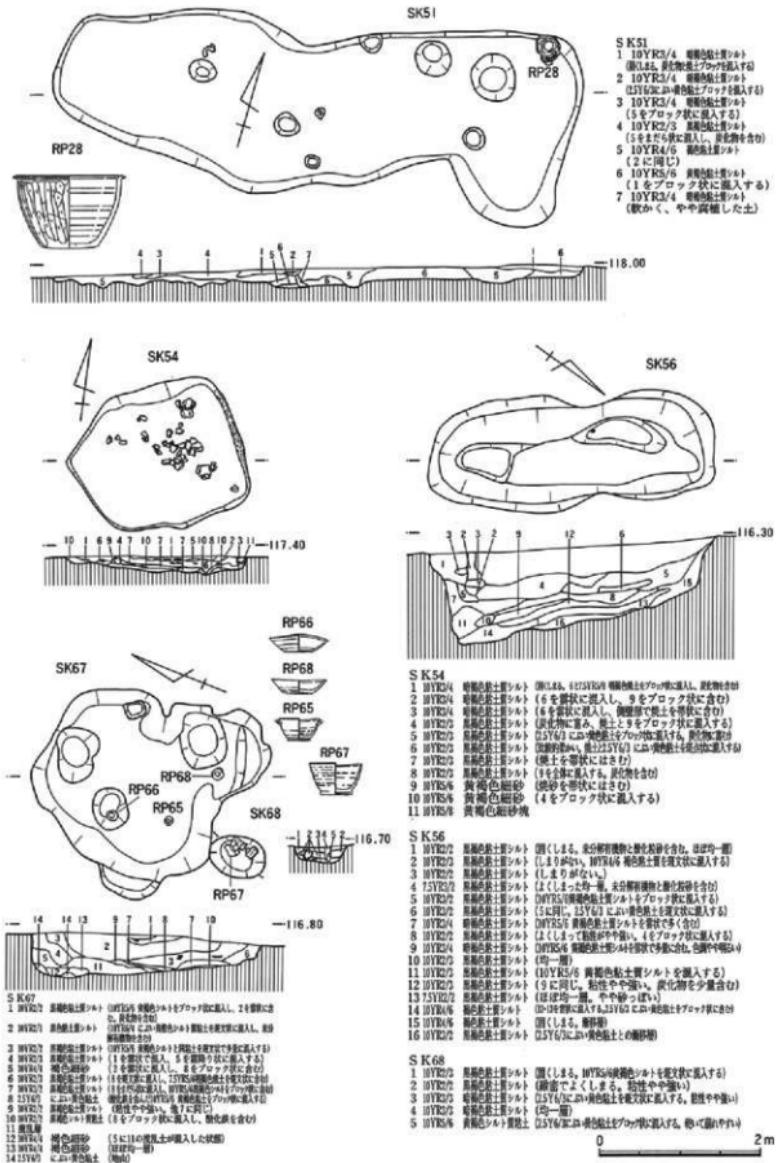
土壤として登録したものは30基を数える。ここでは、形態や規模、遺物の遺存、壁面の被熱などの要素から特徴的な土壤について、その概要を記述する。

S K54・59土壤(第12・13図、図版12)は、壁面の一部に酸化状態で火熱を受けた焼面をもつといわゆる焼壁土壤であるが、赤焼土器の焼成を目的とした“窯場”には当たらない。S K54は、 $2 \times 1.8m$ を測り隅丸方形を呈する。東側壁部と中央部の堆積土中に焼土が認められる。出土土器は赤焼土器の占める割合が高い。S K59は、S Q 1 煙道部の北西約2mに位置する。長径1.8m、深さ50cmの規模で、プランは隅丸長方形である。東側壁部に被熱面が見られ、覆土中に大量の炭化物を混入するが、出土遺物はない。

S K64・65土壤(第12図、図版12)は、D区北縁部で5mの間隔をおき並んで検出された土壤である。平・断面形は伴に箱型を呈し、深さが約50cm、長軸方向は等高線に対し平行するというように、形態・規模・配置・堆積土等において共通した内容が認められる。形態や規模の値が陥穴群II類に類似すること、陥穴群I類の配列と平行して配置されることなどの要因から、底面にピットを持たない陥穴である可能性が考えられる。



第12図 SK59・65土壤



第13図 SK51、54、56、67、68土壤

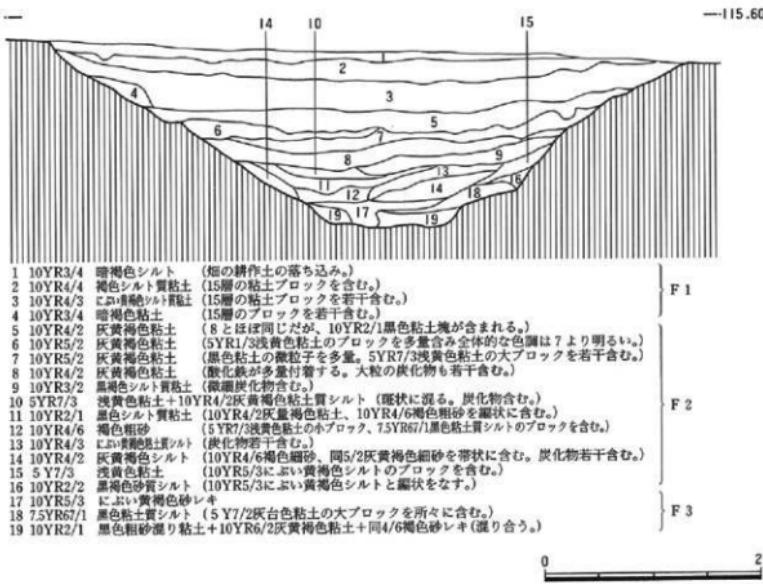
S K51土壤(第13図、図版12)は、長径6.5mを測る大型の土壤であるが、検出面からの深さは10~20cmと浅く、堆積土もほぼ單一層である。底面は凹凸が激しく、数箇所にピット状の掘り込みが認められる。遺物は、北東隅で須恵器の鉢(RP28)が出土している。

S K56土壤(第13図、図版12)は、陥穴群S K41と42の間に検出された、平面プランが不整橢円形を呈する土壤である。長径3.5m、最大幅1.5mを測る。深さは長軸北西部と南東部で異なり、北西に向かうにつれ徐々に浅くなる。底面はほぼ平坦だが、南東部と西側には落ち込みがある。壁面は急激に立ち上がり、途中に段を作ること。

S K67・68土壤(第13図、図版13)は、沢状鞍部西側で2基隣接して検出された。SK67は不整円形を呈する土壤で、規模は南北2.3m、深さ25~50cmを測る。南東部に段階状の中段を有し、側壁の立ち上がりは全周において急である。底面は4箇所でピット状に掘り込まれる。SK67の南辺部に接するSK68は、長径70cm、深さ20cmで、小型の橢円形を呈する土壤である。両壤の出土遺物は、回転糸切りによる須恵器壺を主体とする。

6 河川跡(第14図、図版14)

河川跡は、F区を縦断する形で検出された。検出長31m、幅は2.3~6mを測り、調査区北半ではプランが明瞭に確認できたが、南半部では地山との境が識別し難い。南部に向かい徐々に低くなる地形状況から、氾濫原の可能性が考えられる。第14図は、調査区北辺部での土層セクションである。覆土層が水平に堆積する自然堆積の様相を示し、堆積土は基本的に3層(F1~F3)に分けられる。出土遺物の層位はこの区分によって行った。



第14図 F区河川跡土層断面

IV 出土遺物

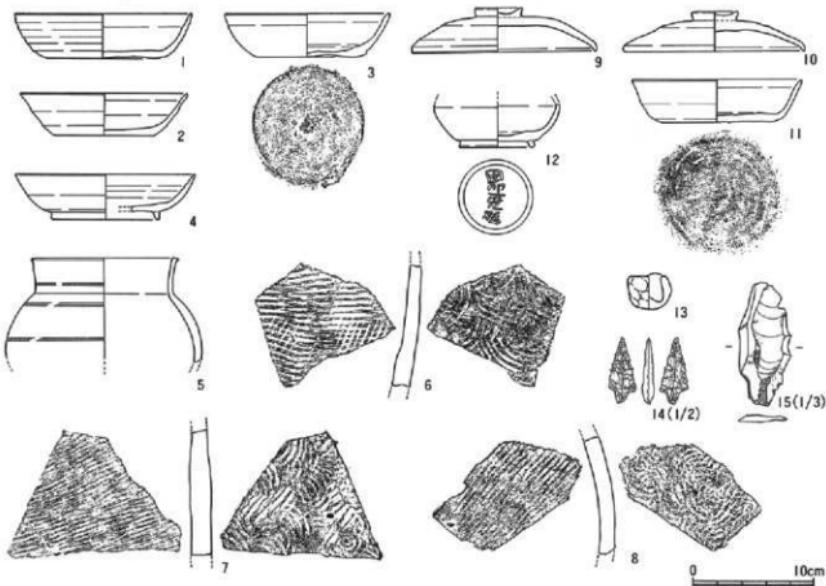
1 窯跡・包含層出土遺物（第15図、表2、図版15）

S Q 3 窯跡を含め、3基の窯体内から出土した遺物は36点と少ない。実測図化できた9点の内、S Q 1 窯跡出土の石器剝片（15）は、紛れ込みによる二次堆積の混入品である。須恵器坏は高台の付く4も含め、回転ヘラ切りによる切離手法を用いる。体部にやや丸みをもつ器形（1・3・4）と、底部から直線的に立ち上がる器形（2）が認められる。法量的にはほぼ等しい形態である。5の短頸壺は、胴部に対する口径の比が大きい広口となる。壺片胴部資料の打圧調整は、6が格子状タタキ、7・8は平行タタキで、内面アテは3点とも青海波ないし同心円によるものである。

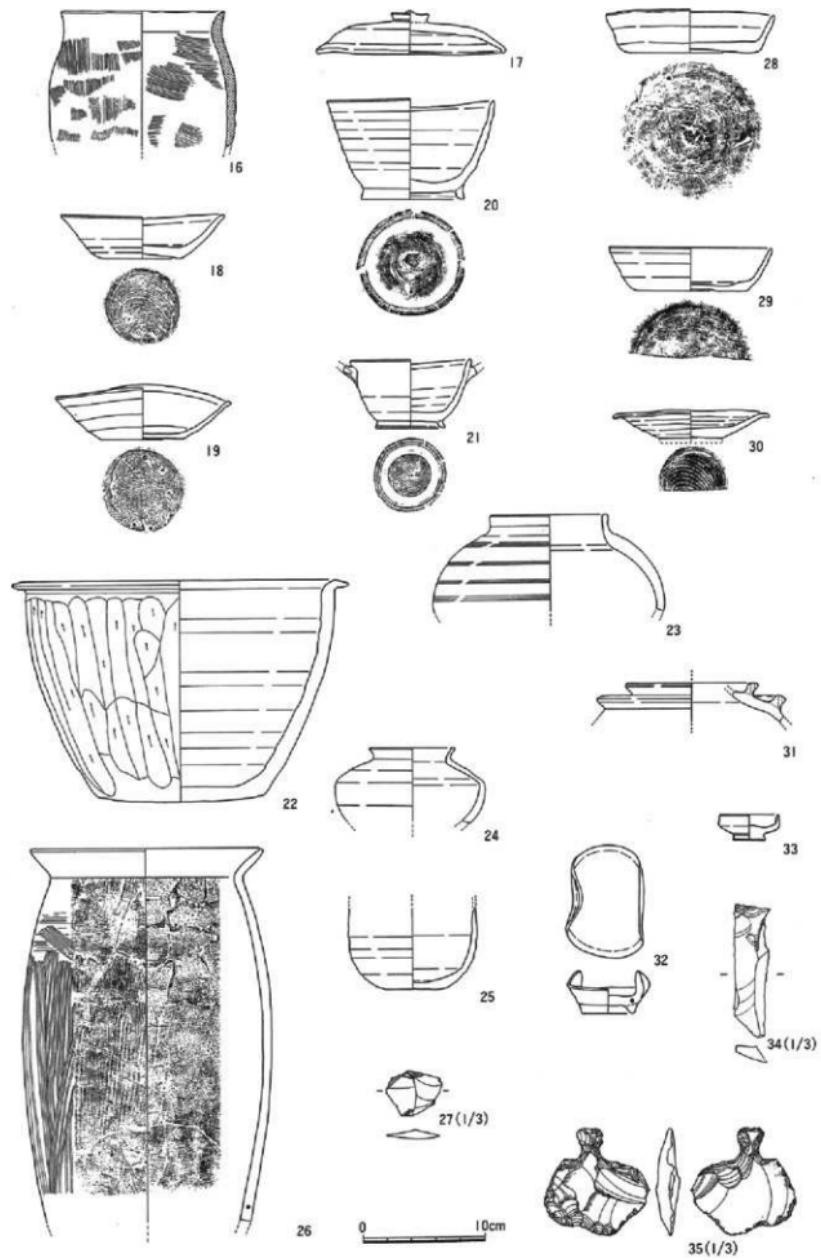
包含層出土として取り上げた遺物は、整理箱にして4箱程である。大方が細片で、測図可能な資料は6点のみであった。須恵器蓋（9・10）は、天床部から側縁にかけ緩やかな丸みをもち、9の天床部は回転ヘラ削り痕を明瞭に残す。須恵器坏（11）は、窯跡出土のそれらと形態や技法において同一形式と見成すことができる。12は小形壺の下半部資料であるが、有台を伴う底面に「男□□」とヘラ書き文字が刻まれている。

2 土墻・河川跡出土遺物（第16図、表2、図版15・16）

S K73土墻出土の16は、内外面にハケ目調整が施された土器器蓋である。頸部が「く」の字状に屈曲し、胴部上半に最大径を有する。17の須恵器蓋はS K50土墻出土で、やや偏



第15図 窯跡・包含層出土遺物



第16図 土壤・河川跡出土遺物

平な宝珠形の鉢を伴う。S K67・68土壤出土の18～21は、回転糸切り手法による須恵器坏・高台坏である。坏（18・19）は、口縁部に亜みが見られ、口径14cm内外、底径6.5cm前後、器高4cm内外の法量枠に収まる。高台坏（20・21）は、概して器高が高い深身の形態で、21は左右に把手が付く有台の多耳坏である。22・24・25はSK51土壤出土の須恵器である。22の鉢は体部の外傾が内窓気味に立ち上がり、口縁部ではほぼ直角に外反する。外面は底辺部から口縁部に向かって、丁寧にヘラ削りが施される。底部は横ナデによる調整であるが、指頭の押圧痕が認められる。24は小形の壺、25は器形的に椀形と言える形態である。23は口縁部が直立する胴張りの須恵器壺で、SK74土壤出土である。26の赤焼土器壺は、SK54土壤から出土している。長胴の形態で、器面調整は胴部外面上半と内面がカキ目、外面下半はハケ目による。27の剥片は、SK30陶穴より出土した唯一の遺物である。

河川跡から出土した遺物には、須恵器、赤焼土器、近世陶磁器、土製品、石器などがある。量的には土器が圧倒的に多く、須恵器9箱、赤焼土器6箱で、その他の割合は僅少でしかない。実測可能な遺物の中で、層序的に特徴のある遺物を選んで図示した。F1層では、回転糸切り離しによる須恵器皿（30）と、台脚部を除く外面に線軸を施した近世陶器の壺（33）が出土している。F2の遺物には、箸置き用途の赤焼土器耳皿（32）がある。28・29は、F3層出土の須恵器坏である。28は完形品で、出土土器坏類の中では、底径指數（口径に対する底径の比率）が最も大きい部類に属する。31は断片資料であるが、飾り壺の肩部に当たる部分と思われる。有台坏の台脚を二重に巡らしたような特異な形態を呈し、飾り台脚張り付け後、内外同位置に串状の突起物で垂直に刺した小孔が認められる。外面には、自然釉が全体に付着している。

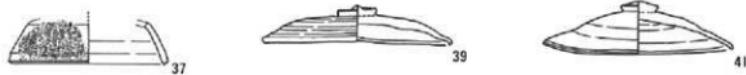
3 壺穴住居跡出土遺物

6軒の住居跡から出土した遺物は全て土器であり、種別的に土師器、須恵器、赤焼土器と、二次的混入による繩文土器片がある。器種別には、須恵器が供膳および貯蔵形態、土師器と赤焼土器は煮沸形態に代表される。以下では、土器組成の概略を住居跡毎に記す。

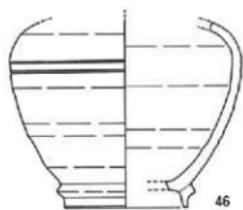
S T11堅穴住居跡の土器（第17図、表2、図版16・17）

須恵器の器種には蓋、坏、高台坏、壺がある。蓋は、短頸壺の蓋で肩の張る深身のもの（36・37）と、鉢が宝珠様の形態を呈する坏蓋で、天床部に回転ヘラ削り調整を施し天床部が平坦なもの（38・39）、最終をナデ仕上げとし背高で肩に丸みのあるもの（40・41）に分類される。坏（42・43）と高台坏（44・45）は底部切り離しが回転ヘラ切りで、坏はナデ調整が行われる。37の蓋体部に「川」の線刻が施され、45の底部には窓壁塊が付着する。これらと共伴する壺（46）は、口縁部を薄くつまみ上げた直立する高台が付けられる。肩部下には2条の筋が巡り、体部下半を回転ヘラ削りで調整している。

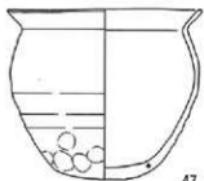
赤焼土器の器種は既に統一され、4個体が一括的に出土している。形態的には小形（47）、中形（48）、長胴の大形（49・50）壺に分類され、口縁部が「く」の字に開く共通性は窺える。さらに各々の特徴を挙げれば、47は頸部が縮まり口径と胴部最大径が近似し丸底であること、48は頸部が縮まらず外反する口縁に最大径を有すること、50は口唇部でわずかにかえ



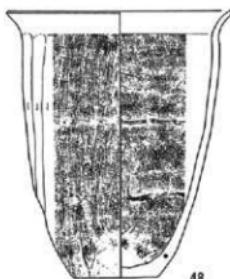
45



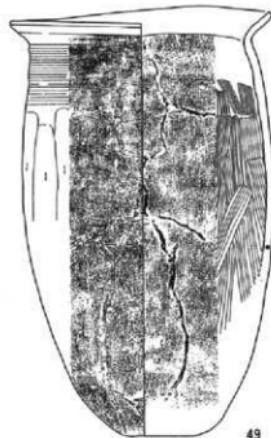
46



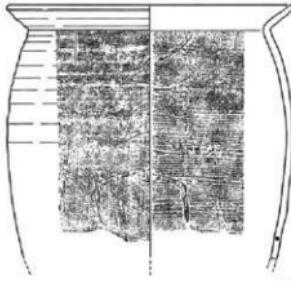
47



48



49



50



51



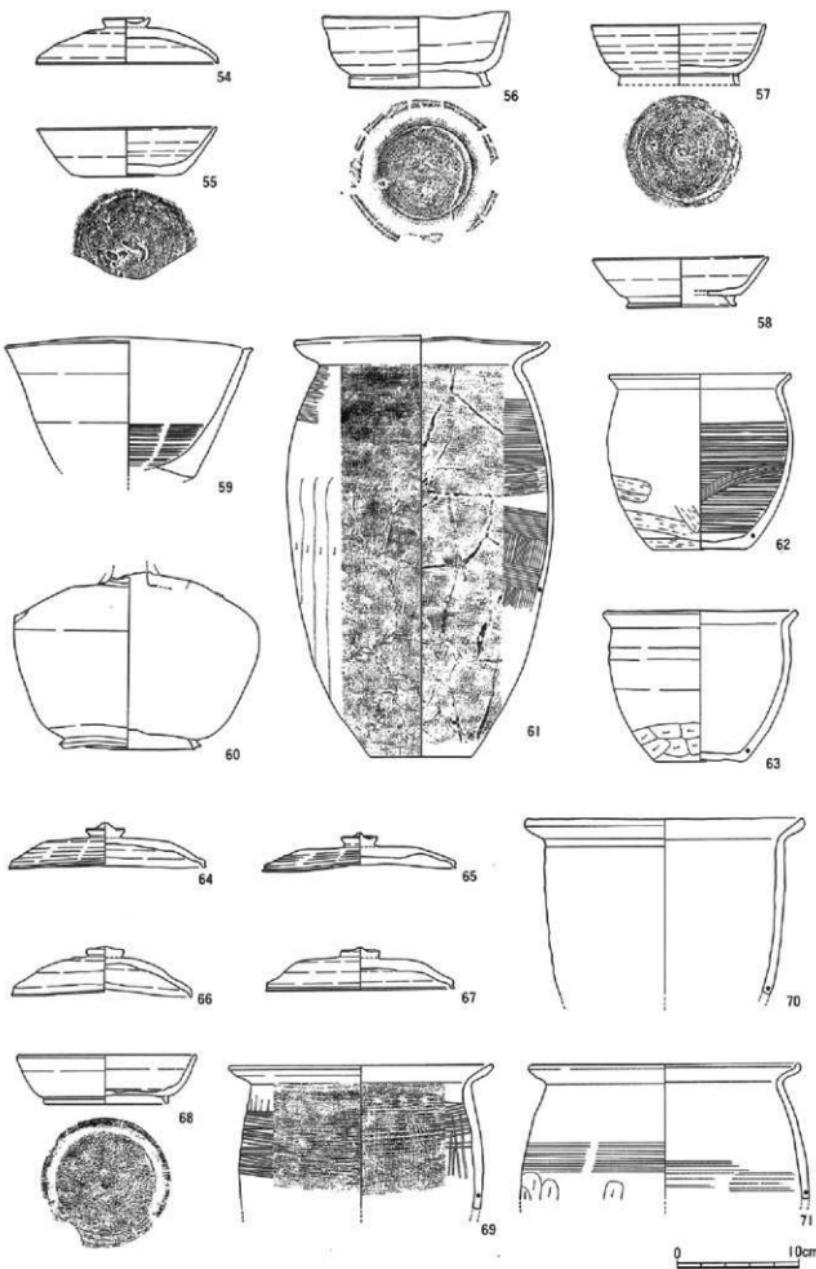
52



53

0 10cm

第17図 ST II 住居跡出土土器



第18図 ST12・ST13住居跡出土土器

りが認められることなどである。器面調整は小形甕を除いて、ロクロ→手持ちヘラ削りを基調とし、内面はハケ目調整が主である。51~53は、縄文時代後晩期の所産と捉えられる。

S T 12堅穴住居跡の土器 (第18図、表2・3、図版17・18)

須恵器の器種に蓋(54)、坏(55)、高台坏(56~58)、鉢(59)、甕(60)がある。蓋の鉢は中心部が若干突起するが全体に窪み、天床部に削りを伴う。坏類では、法量的に大きい56は体部も肥厚で、他に比べ大柄な形態を示す。59は内面下半に横位の卸し目が施された掘鉢であるが、口縁部に片口状の注口は認められない。甕は口頭部を欠損するが、長頸甕である。焼歪みで押し潰されたような形状を呈し、肩部左右には耳(?)の取り付け痕が残る。

赤焼土器は、大形長胴甕(61)と小形甕(62・63)である。器面調整はロクロ整形の後、61は外面下半にヘラ削りを施し、ナデによって器面を整えている。内面には縱・横方向にハケ目が施される。62・63は、外面底辺部~下半部に横方向の手持ちヘラ削り痕が認められる。62の内面は横位のハケ目調整である。

S T 13堅穴住居跡の土器 (第18図、表3、図版18)

須恵器の器種に、蓋(64~67)と高台坏(68)がある。蓋はいずれも宝珠形の鉢が付けられ、口唇を薄くつまみ出す形態は共通するところである。体部の形態では、天床部が平坦な台形様(64・67)で、かつ偏平なもの(65)と、肩の丸い半球形のもの(66)が窺える。

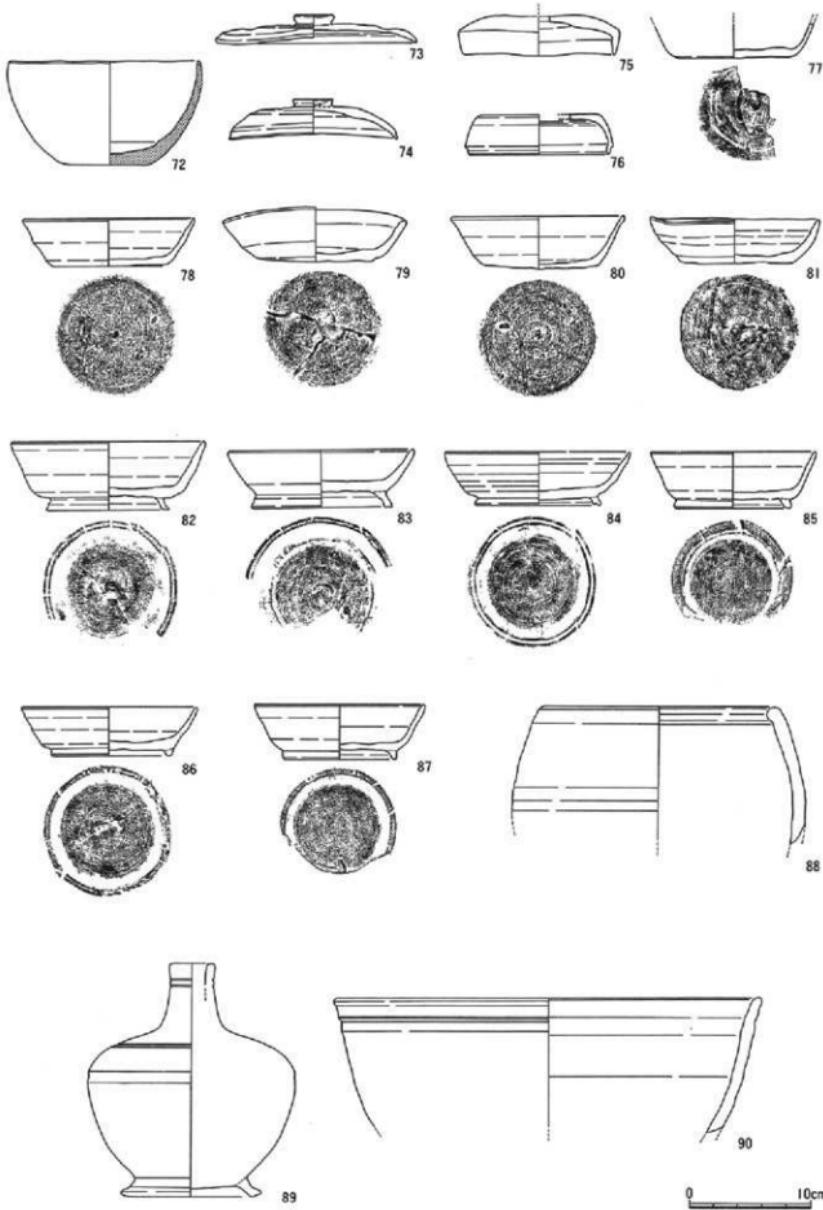
赤焼土器の甕は、3個体の上半部資料が出土している。S T 12住居跡の甕3個体も含め70・71には、外反した口縁部からさらに口唇を垂直に短くつまみ上げる特徴が認められる。これに対し69は、口唇部に屈曲的変化を見ない単純口縁である。調整技法は、69に内外面ともハケ目(縱方向→横方向)で、71は横位のハケ目と外面にヘラ削りが施される。

S T 14堅穴住居跡の土器 (第19・20図、表3、図版18・19・20)

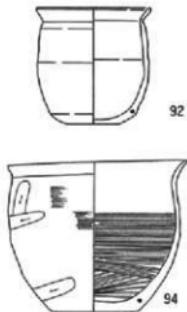
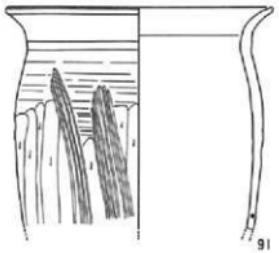
72は、供膳形態で唯一出土した土師器の坏である。口縁部から体部の外傾が内弯し、底部は平底である。内面に黒色処理は施されず、器面の削りやミガキも観察されない。

須恵器の器種は、蓋(73~76)、坏(77~78)、高台坏(82~87)、甕(89)、甕(89)、鉢(90)である。坏蓋は口径から、73が82の高台坏と、74が81か85と各々セット関係になると思われる。75・76は短頸甕の蓋である。有台・無台の坏は回転ヘラ切り離して、細部の差異を除いて法量・形態等に大差ないと判断できる。個々の特徴を挙げれば、80の口縁がやや肥厚して外反気味であること、82の高台の位置が底部外縁よりかなり内側に取り付くことなどである。79の底面にはヘラ書き文字「山」が、83には「×」のヘラ記号が記されている。甕は胴部中央で最大径を測り、内弯する口縁部は球状に丸みをもつ。器形が樽型の形態を呈すると思われる甕である。甕は、「ハ」の字に開く高台を有する細頸甕である。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、そのまま口縁へ移行する形態である。口縁と頸部の境および肩部に2本の沈線が巡り、肩部には上半と下半を分けるように凹帯が回っている。鉢は口径が35cmに及ぶ大形の形態で、口縁部外面下に一条の隆線が認められる。

赤焼土器は、91の大形甕と92の小甕である。91は、頸部が短かく直立するように屈曲している。外面の調整は、胴部下半から底部に向けたヘラ削り後にハケ目が施される。

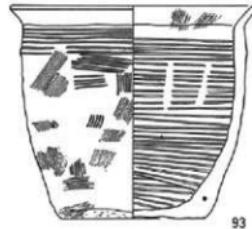


第19図 ST14 住居跡出土土器

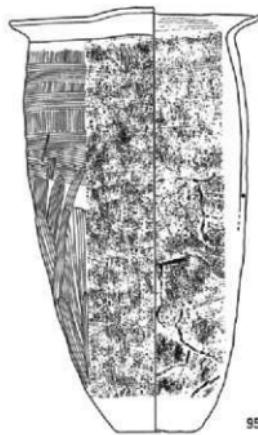


92

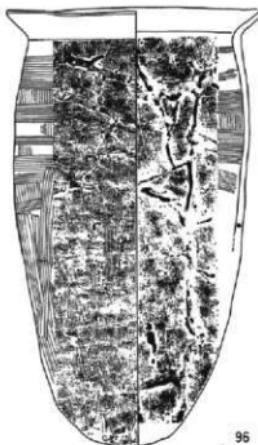
94



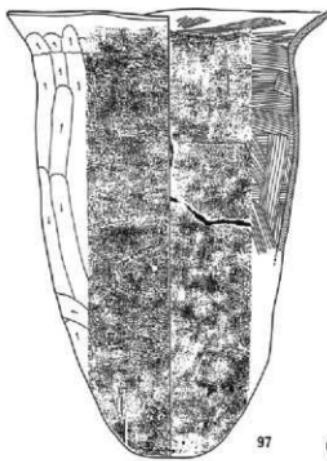
93



95

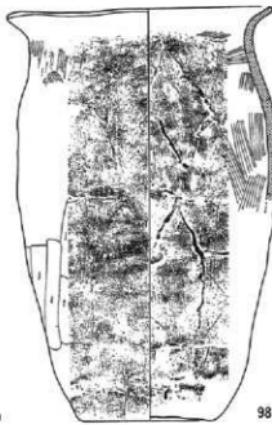


96



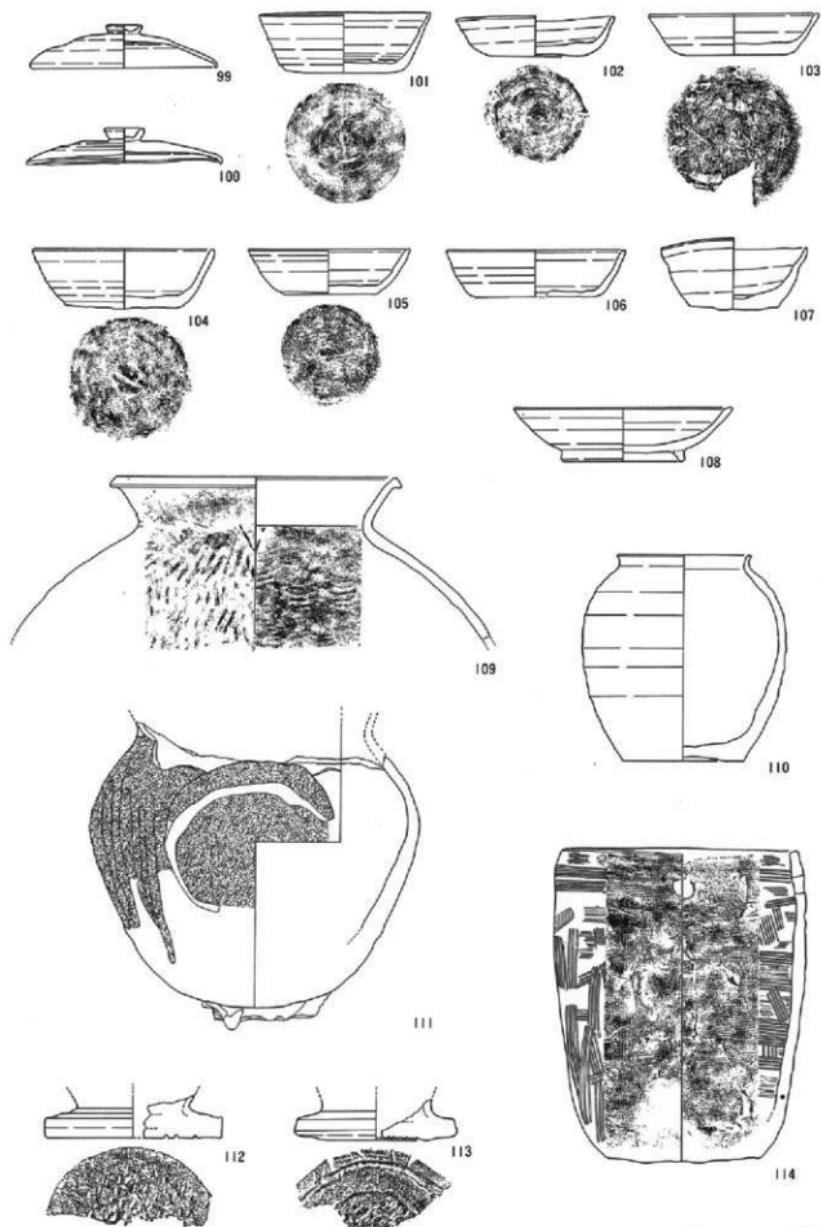
97

0 10cm



98

第20図 ST14・ST15住居跡出土土器



第21図 ST15・ST16住居跡出土土器

S T 15 穹穴住居跡の土器 (第20・21図、表3、図版19・20・21)

煮沸形態に、土師器壺 (97・98) と赤焼土器の壺 (94~96)・鉢 (93) がある。97・98は、巻き上げや輪積み成形後に、ロクロを使用しない土師器の大形壺である。97は口縁部が大きく開く丸底の器形で、器面の調整は、口縁部まで含め外面が全面ヘラ削り、内面は同じく縦・横・斜位のハケ目が施される。98は輪積み痕が残る平底の器形で、外面上半にハケ目、下半は削りが施され、内面はハケ目による調整である。赤焼土器の器種に壺と鉢があり、93は形状的に鉢として扱ったが、調理具の鉢として捉えるよりは、外面に煤の付着が見られる事由から、本来的に煮沸形態の器種であった可能性が強い。したがって、94等と同様小形壺として認識する方が妥当かと考える。調整は、内外面とも横位のハケ目を基調とする。長胴の大形壺は95が平底、96は丸底である。内外面ともに丁寧なハケ目調整が施され、口縁部では横ナデによる調整を行っている。

供膳形態には、須恵器の蓋・壺・皿がある。蓋 (99・100) は中央部に窪む鉢をもち、口縁部が直立する器形である。壺 (101~107) は、器形がほぼ同一型式であるものの法量的に差異が認められ、S T 14出土壺類のような規格性は感じられない。底部の処理においても、回転ヘラ切り無調整 (101・102) と、底部全面手持ちヘラ削り (103) やナデ仕上げ (104~107) の再調整を伴うものに分類できる。皿 (108) は、高台の付く底部から大きく開いて外傾し、口縁に平坦部を有する作りである。

貯蔵形態は須恵器の壺・壺、それに調理用擂鉢（器台）である。109は大壺の口縁～肩部の破片資料で、頸部が「く」の字に強く屈曲し、口縁部ではさらに外反して口唇が引き出される。打圧調整は平行タキ、内面アテは青海波文で、部分的にハケ目が施される。111は体部に灰や自然釉を被る短頸壺であるが、肩部以上は焼成時の焼き割れで欠損し、壺内と底部には窓壁塊が付着している。112・113は、S T 12で出土したような深鉢形擂鉢 (59) の底部に付く円盤である。厚い円盤は、器の安定を図るために付けられた台で、底面には焼き割れを防ぐ目的から刺突された無数の小孔が認められる。

S T 16 穹穴住居跡の土器 (第21図、表3、図版21)

赤焼土器の壺 (114) が図示できた唯一のものである。屈曲する頸部形態は省略され、長胴壺を上半部中程で切断したような器形を呈する。底部は広い平底であり、概して寸胴な形状を成す。口縁下3cmの体部には、対面どおしに穴が空けられており、吊した形跡が窺い知れる。胎土・焼成とも良好で、かなり堅牢な作りである。

4 E 調査区出土遺物 (第22~25図、表3・4、図版21~24)

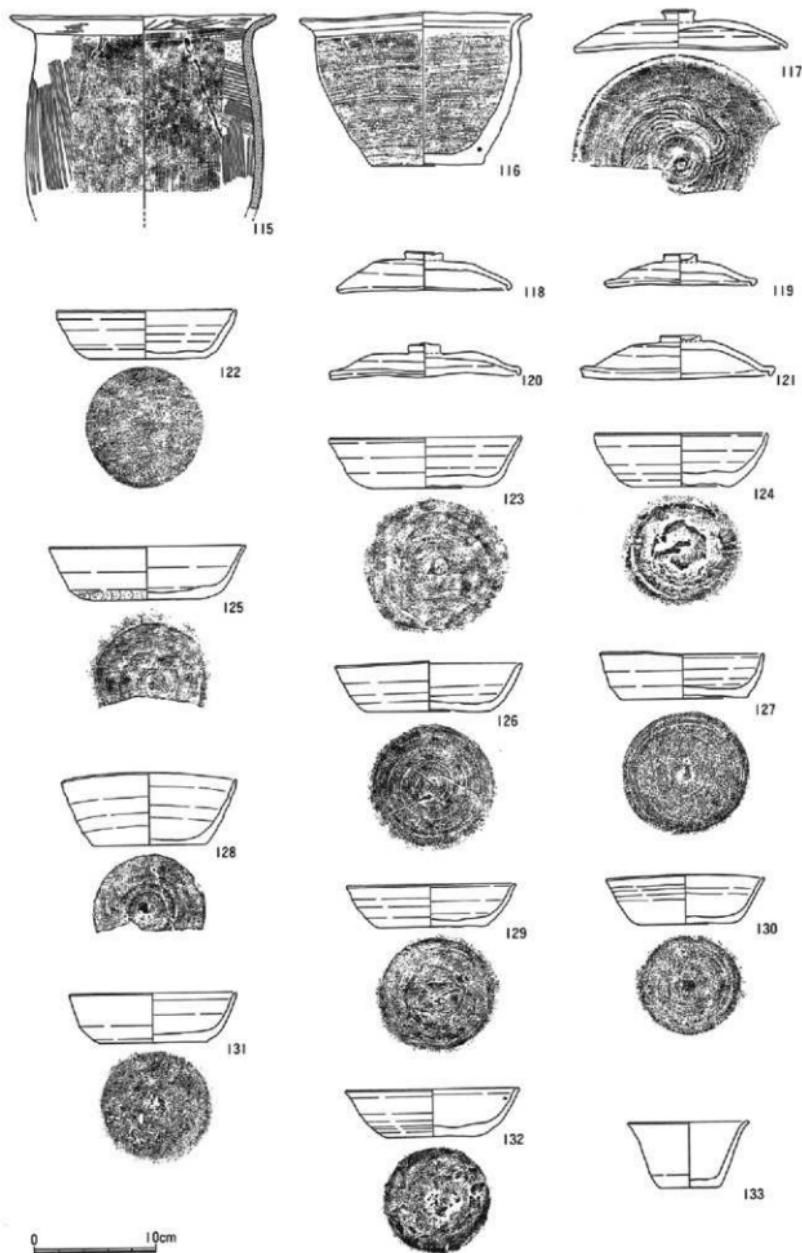
土師器は、115の壺が出土している。頸部から口縁部が大きく外反し、口径に最大径を測る形態である。調整手法は内外面ともハケ目によるもので、外面では縦方向に、内面は上部で横・斜位方向、下部では縦方向に施される。口縁部外面には横ナデを加えている。

須恵器の器種は、供膳形態で蓋および有台・無台の壺があり、貯蔵形態に鉢・壺・壺・横瓶がある。蓋 (117~121) は鉢の形様に宝珠形、ほぼ偏平様、中央部に窪む形の3種類が見られ、天床部の切離および調整から回転ヘラ切り離し (117・120)、回転糸切り離し (121)

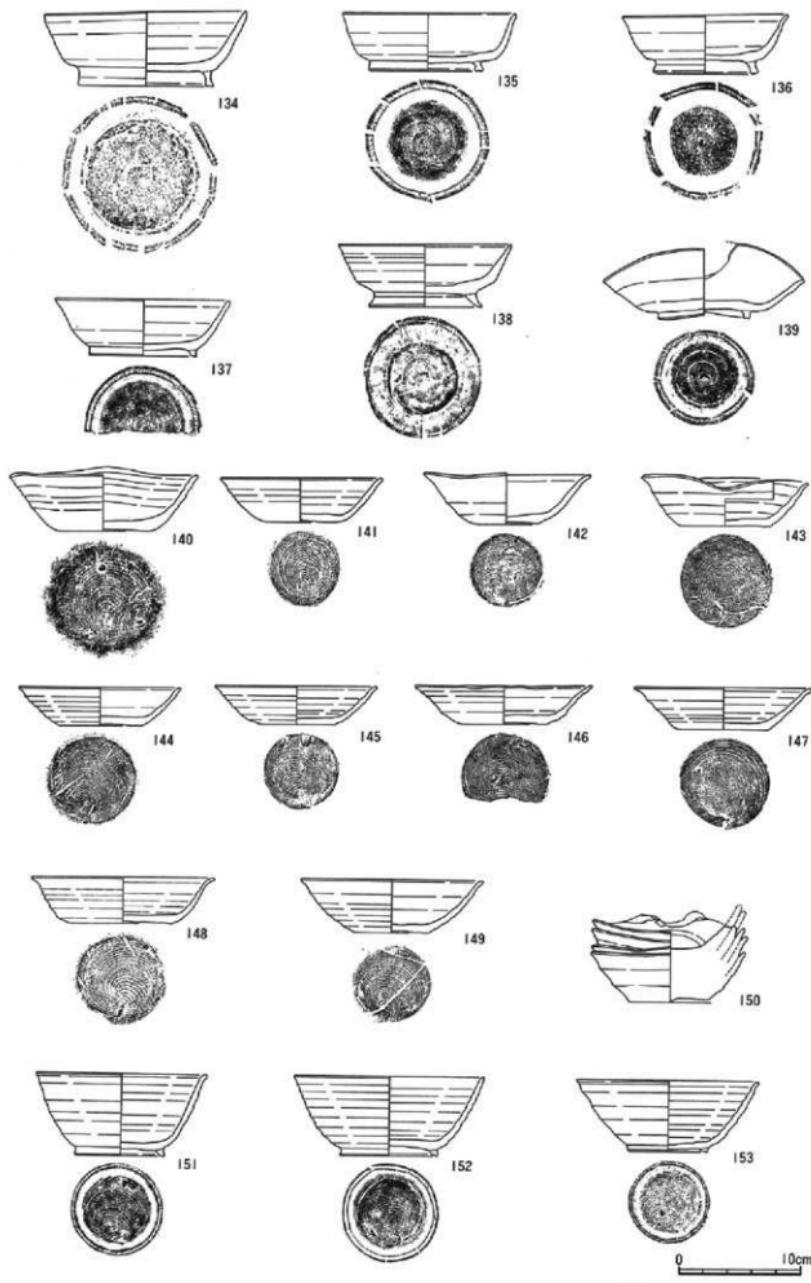
と、ナデ調整により切離痕跡を止めない類型（118・119）に区分できる。117の内面肩部には、青海波文のアテ痕が認められる。壺類は底部の切離手法から、回転ヘラ切りと回転糸切りに大別される。ヘラ切りの無台壺（122～132）は、底径が口径の6割を越えるものが多く、体部の外傾度が小さいため立ち上がりは急激である。125は底辺部に手持ちヘラ削りが施される。ヘラ切り有台壺（134～139）は、法量的に無台壺と同一形態と見成せるものである。138は体部下半に陵が形成される器形の特徴が見られ、また139は、成形段階で両端部を耳皿風に持ち上げることで、左右が注口状の器形を成すという特異な形態が指摘される。糸切の無台壺（140～150）と有台壺（151～153）には、次のような形態的特徴が見られる。すなわち、底径が口径の5割以下のものが主体を占め、体部の外傾度が大きいこと、体部の立ち上がりが直線的またはやや内弯気味で、口縁部が弱く外反すること、有台壺は器高が高い深身の形態で、法量が大きいことなどである。貯藏形態の鉢（154）、甕（155・156）は、大形の器種である。鉢は内面にヘラ削り痕を認める。155はタタキ縮め後、ロクロ整形を行って外面上半のタタキ痕を消し、部分的に削りやナデによる再調整を施している。156はロクロ整形後に、平行タタキと同心円アテの打圧調整が加えられる。甕（157～161）は頸部の形状から何種かの分類が可能である。157は焼き歪みが激しい短頸甕で、体部には亀裂を生じる。体部外面に調整が見られ、上半は斜状の平行タタキ、下半部に回転および手持ちのヘラ削りが施される。158は口縁が大きく開く広口の長頸甕であるが、体部が球胴を呈する様相から「瓶」と捉えた方が適当であろう。口縁部は口唇が強く引きかえされ、頸部と体部の境界には一条の凸帯が巡っている。160・161は、長頸甕あるいは直口の細頸甕である。焼き歪みでいびつな形狀の160は、肩部の接合部と思われる部分がやや窪んで凹状に巡る。161は、「ハ」の字に取り付けた高台の口縁内側を薄くつまんで直立させており、外形は中程が突出する形狀を呈する。体部外面下半は、ヘラ削りを丁寧に施している。横瓶（162）は、外面にタタキとハケ目の調整痕が認められる閉鎖部の破片資料である。

赤焼土器の器種に壠（163）、甕（164～169）、鉢（116～170）がある。壠は口縁資料であるが、外傾度が小さく深型の形態を示している。164・165は、口縁に最大径を有する長胴の大形甕である。166は形状が樽型となる甕で、頸部は屈曲せず口縁部が肥厚して体部との境界に段を形成する。167・168は小形の広口甕として一括したが、167と同形態の赤焼土器を山形市境田B遺跡（渋谷・黒坂1987）では壠として扱っている。器面調整はいずれも、外面上半中程からヘラ削りが施され、体部には黒斑が認められる。116の鉢はST15住居跡出土の93同様、機能的に小形甕として捉えられる器種である。

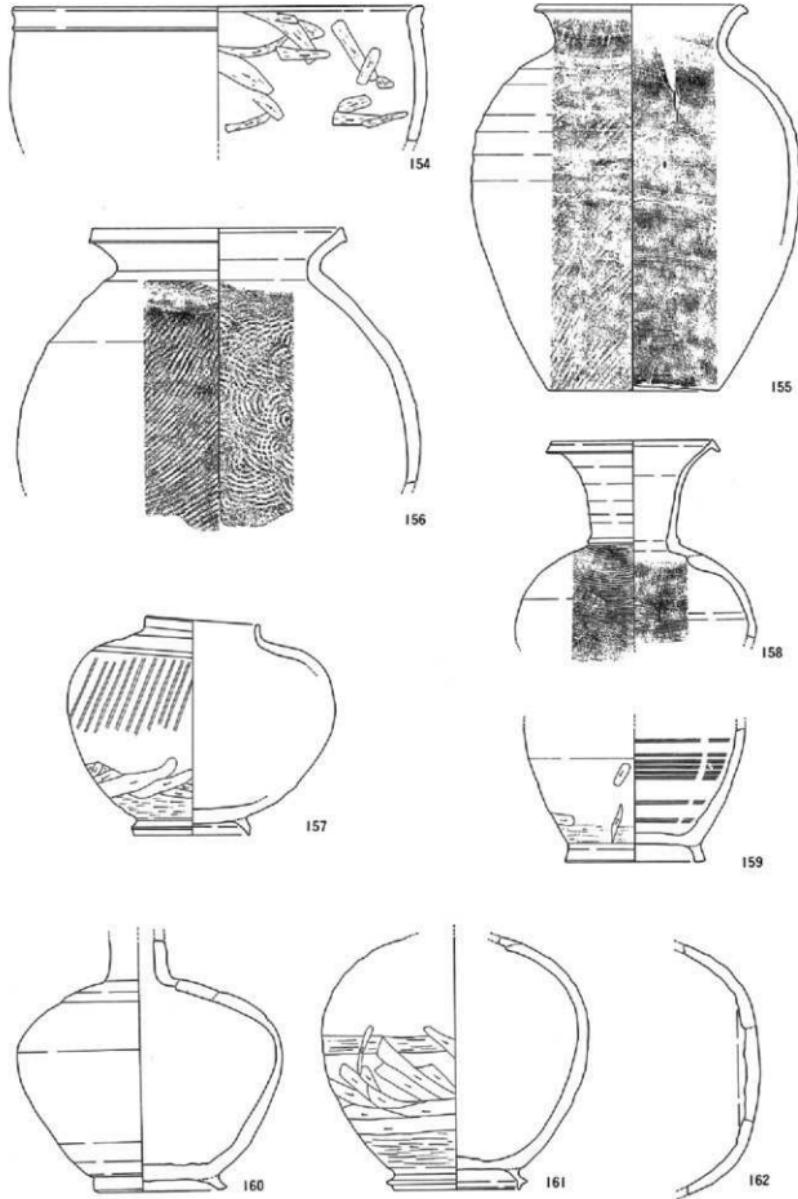
その他の遺物で特筆できるものに、器台の台脚部と考えられる173がある。成形は輪積み痕跡が明瞭に観察され、整形にはロクロを使用している。胎土は細砂を混入しており、焼成は良好な部類に含まれる。色調が浅い黄橙色を呈し、種別的には赤焼土器の範疇に属するものである。器形は脚部が末広がりに大きく外傾して、笠型の形態を示す。外反部左右には、対となる位置に把手状のものが存在したらしく取り付け痕が残され、一部遺存する箇所にはヘラ削りが認められた。



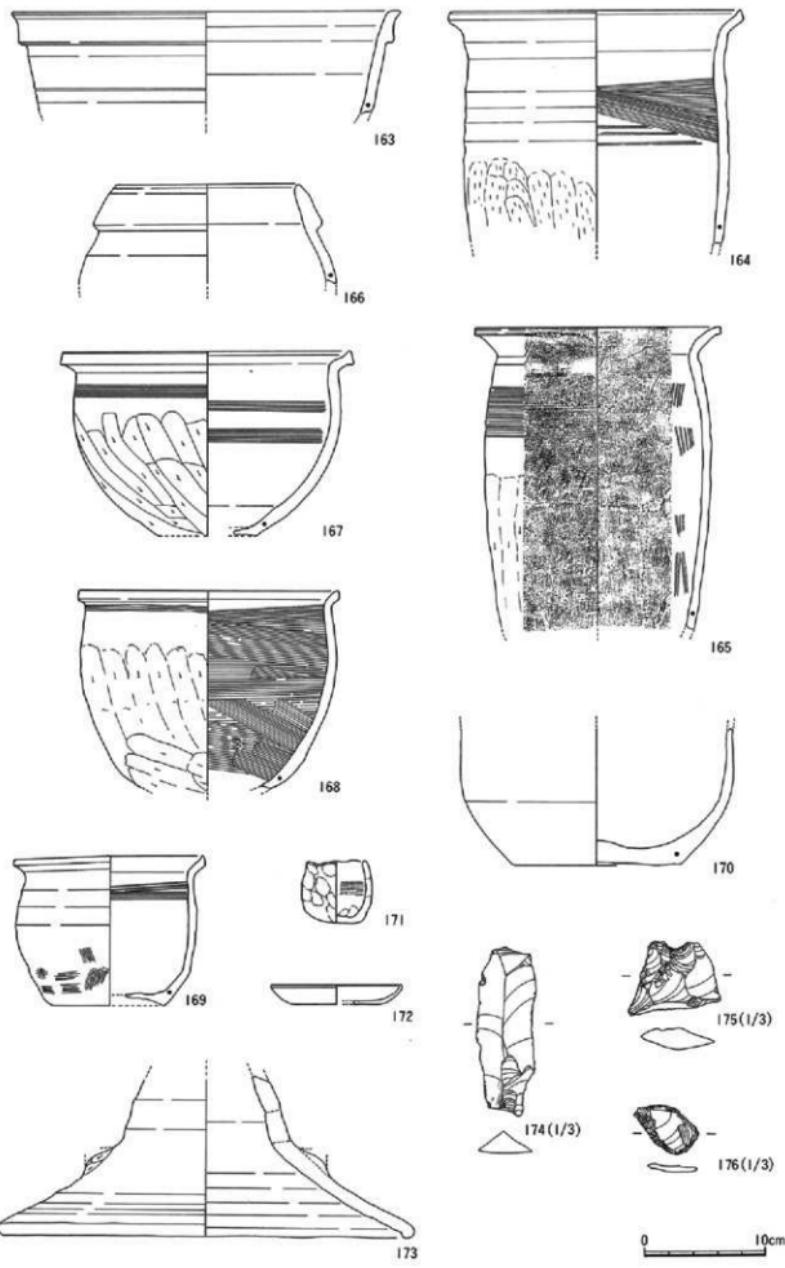
第22図 E区出土土器(1)



第23図 E区出土土器(2)



第24図 E区出土土器(3)



第25図 E区出土遺物

表一2 出土遺物觀察表(1)

所蔵 番号	遺物 番号	器種	計測値(mm)				底部切削	調整方法		出土地点・層位
			口径	底深	側高	厚さ		外面	内面	
第 15 回	1	環	(144)	(90)	37	4	ヘラ切り			SQ2
	2		(136)	(80)	35	3	ヘラ切り			SQ1
	3		134	88	35	4	ヘラ切り			SQ3 (RP96)
	4		(146)	(88)	38	4	ヘラ切り			SQ1
	5	高台環	(120)		(82)	8				SQ1
	6					12	格子状タキ	青海波		SQ1
	7					17	平行タキ	青海波		SQ1
	8					13	平行タキ	青海波		SQ1
	9	壺	(148)		35	6	ヘラ切り	天床部ヘラケズリ		11-37III
	10		(148)		32	6	ヘラ切り			11-31III
	11		(138)	94	35	4	ヘラ切り			11-37III
	12				62	(35)	ヘラ切り			11-31III
	13	手 挿	30		26	7				9-40III
	14	石 器	長さ 27			5				3-7 III
	15		長さ 74			4				SQ1
第 16 回	16	土 師 器	壺	134		(111)	8	ハケ目	ハケ目	SK73
	17		壺	154		35	7	ヘラ切り		SK50
	18	環	壺	132	64	33	5	回転糸切り		SK67 (RP68)
	19		壺	142	67	43	3	回転糸切り		SK67 (RP96)
	20		高台環	134	83	82	5	不明	高台ナデヅケ	SK68 (RP67)
	21		鉢	97	57	56	4	回転糸切り		SK67 (RP65)
	22	壺	鉢	(252)	140	180	11		ケズリ	底部指痕痕
	23		壺	(96)	(80)	8				SK74
	24		壺	70	(61)	5				SK51
	25		壺		48	(61)	4			SK51
	26	赤燒土器	壺	(192)		(303)	8	ハケ目・カキ目	カキ目	SK54
	27	石 器	長さ	28		5				SK30F ₁
	28	須恵器	壺	138	105	35	4	ヘラ切り		FESGF ₃
	29		壺	(130)	88	35	4	ヘラ切り		FESGF ₂
	30		壺	(120)	50	23	4	回転糸切り		FESGF ₁
	31		錐壺				7			FESGF ₃
	32	赤燒土器	耳皿	92	45	35	5	不明	高台ナデヅケ	FESGF ₂
	33	近世陶器			48	26	21	5		FESGF ₁
	34	石 器	長さ	80		8				FESGF ₃
	35		長さ	61		14				FESGF ₂
第 17 回	36	須恵器	壺	130		30	4	ヘラ切り		ST11(RP 2)
	37		壺	(124)		(34)	5	ヘラ切り		ST11
	38		壺	147		26	6	ヘラ切り	天床部ヘラケズリ	ST11(RP 1)
	39		壺	152		30	6	ヘラ切り	天床部ヘラケズリ	ST11(RP 4)
	40		壺	150		38	5	ヘラ切り	天床部ナデ	ST11(RP 15)
	41		壺	154		44	4	ヘラ切り	天床部ナデ	ST11(RP 5)
	42		壺	(160)	(100)	(52)	5	ヘラ切り		ST11(RP35)
	43	高台環	壺	138	96	35	4	ヘラ切り		ST11(RP19)
	44		壺	150	110	47	4	ヘラ切り		ST11(RP11)
	45		壺	150	90	43	5	ヘラ切り		ST11(RP 6)
	46		壺		(101)	(152)	8	回転ヘラケズリ		ST11(RP17)
	47	赤燒土器	壺			143	4		指頭痕	ST11(RP 9)
	48		壺	185	64	218	6	ケズリ	ハケ目	ST11(RP13)
	49		壺	214	68	345	7	ケズリ+ハケ目	ハケ目	ST11(RP16)
	50		壺	232		(210)	5	ケズリ+ハケ目	ハケ目	ST11(RP12)
	51					8				ST11
	52	織文土器				7				ST11
	53					7				ST11
	54		壺	148		38	7	ヘラ切り	天床部ヘラケズリ	ST12(RP26)
第 18 回	55	須恵器	壺	(146)	(86)	40	5	ヘラ切り		ST12EP 3
	56		壺	153	115	58	7	ヘラ切り		ST12(RP23)
	57		高台環	142	97	40	4	ヘラ切り		ST12(RP33)
	58	編	壺	(143)	(88)	40	4	ヘラ切り		ST12
	59		壺	203		(111)	7			ST12(RP24)
	60		壺			106	(147)			ST12(RP21)

表一 3 出土遺物観察表(2)

探査番号	遺物番号	器種	計測値(mm)				底部切離	調整校法		出土地点・層位
			口径	底径	器高	器厚		外面	内面	
第18段	61	赤燒土器	要	208	84	340	5	ケズリ・ナデ	ハケ目	ST12RP1
	62			(146)	76	143	6		ハケ目	ST12(RP36)
	63			(153)	78	124	7		ハケ目	ST12(RP25)
第19段	64	須恵器	要	158	36	6	ヘラ切り	ST13(KP38)		
	65			158	31	4	ヘラ切り			ST13(KP37)
	66			145	41	5	ヘラ切り			ST13EK1(KP75)
	67		高台坏	153	35	9	ヘラ切り	ST13(KP39)		
	68			146	102	40	5			ST13(RP44)
	69			(214)	(118)	7			ハケ目	ST13(RP41)
第20段	70	赤燒土器	要	(226)	(145)	7		ケズリ・ハケ目	ハケ目	ST13
	71			(218)	(111)	6				ST13(RP43)
	72			(157)	70	84	8			ST14(RP52)
第21段	73	須恵器	蓋	162	24	5	ヘラ切り	ST14EP5		
	74			139	32	4	ヘラ切り			ST14EK1
	75			(124)	(33)	5	ヘラ切り			ST14
	76		坏	(114)	(98)	(32)	5	ST14		
	77			(130)	(88)	(29)	5			ST14
	78			140	94	40	3			ST14(RP46)
第22段	79	須恵器	坏	148	90	47	5	ST14(RP47)		
	80			140	94	43	5			ST14(RP45)
	81			138	94	36	7			ST14(RP57)
	82		高台坏	169	100	57	7	ST14		
	83			150	114	48	7			ST14(RP59)
	84			152	100	44	6			ST14EK3
	85		高台坏	135	94	47	4	ST14EK2		
	86			144	100	41	4			ST14EK3
	87			(138)	92	46	4			ST14EK2
	88		要	(190)	(112)	10		ST14		
	89			38	110	190				ST14EK4(RP76)
	90			(348)	(108)	10				ST14
第23段	91	須恵器	要	(218)	(180)	8	ケズリ・ハケ目	ST14EK4		
	92			(93)	44	94	4			ST14
	93			(200)	(116)	174	11			ST15(RP71)
	94		鉢	(145)	70	124	5	ST15		
	95			200	64	337	6			ST15(RP94)
	96			214	354	7	ハケ目			ST15(RP93)
	97		土師器	262	362	5	ケズリ	ST15(RP92)		
	98			(210)	104	337	7			ST15(RP91)
	99			151	36	3	ケズリ・ハケ目			ST15(RP94)
第24段	100	須恵器	蓋	169	30	7	ヘラ切り	ST15		
	101			(140)	98	59	4			ST15(RP69)
	102			130	76	33	5			ST15EK2
	103		坏	(137)	96	34	3	ST15		
	104			147	94	51	7			ST15
	105			(132)	75	38	5			ST15
	106		蓋	(143)	(98)	39	5	ST15		
	107			120	74	58	7			ST15(RP72)
	108			(173)	(95)	44	6			ST15EK2
	109		要	(226)	(132)	7		ST15		
	110			(104)	(100)	168	7			ST15(RP63)
	111			(235)	9					ST15
	112	鉢	台	(144)	(34)	(17)		ST15		
	113			(134)	(32)	18				ST15
	114			191	126	250	9			ST15
第25段	115	須恵器	要	(210)	(156)	8	ハケ目・カキ目	ST16		
	116			190	91	124	10			E区
	117			(170)	33	6	ヘラ切り			E区
	118		蓋	138	30	4	ナデ不明	ST16		
	119			120	27	5	ナデ不明			E区
	120			(154)	29	5	ヘラ切り			E区

表一4 出土遺物観察表(3)

器物番号	種類	計測値(mm)				底部切削	調整方法		出土地点・層位
		口径	底径	高さ	壁厚		外面	内面	
第22回	環	121	蓋	152	36	5	回転糸切り		E 区
		122		(146)	40	5	ヘラ切り	底部ヘラケズリ	E 区
		123		157	41	4	ヘラ切り	底部ヘラケズリ	E 区
		124		142	42	5	ヘラ切り		E 区
		125		(160)	45	4	ヘラ切り	底部ヘラケズリ	E 区
		126		150	40	5	ヘラ切り		E 区
		127		133	35	3	ヘラ切り		E 区
		128		(143)	60	3	ヘラ切り		E 区
		129		(140)	34	4	ヘラ切り		E 区
		130		130	40	3	ヘラ切り		E 区
第23回	高台環	131		(136)	41	4	ヘラ切り		E 区
		132		142	39	4	ヘラ切り		E 区
		133		(98)	52	3	不明		E 区
		134		164	60	6	ヘラ切り		E 区
		135		143	47	5	ヘラ切り		E 区
		136		136	48	4	ヘラ切り		E 区
		137		142	46	3	ヘラ切り		E 区
		138		142	51	5	ヘラ切り		E 区
		139		(164)	54	4	ヘラ切り		E 区
		140		155	46	5	回転糸切り		E 区
第24回	横窓器	141		130	36	4	回転糸切り		E 区
		142		134	42	4	回転糸切り		E 区
		143		138	31	4	回転糸切り		E 区
		144		132	32	3	回転糸切り		E 区
		145		130	32	4	回転糸切り		E 区
		146		(144)	32	3	回転糸切り		E 区
		147		143	35	4	回転糸切り		E 区
		148		(150)	38	3	回転糸切り		E 区
		149		148	44	3	回転糸切り		E 区
		150		65			回転糸切り		E 区
第25回	横窓	151		140	78	4	回転糸切り		E 区
		152		156	65	3	回転糸切り		E 区
		153		150	58	4	回転糸切り		E 区
		154		(336)	9			ケズリ	E 区
		155		(162)	317	8		ハケ目	E 区
		156		(204)	(205)	10	平行タキ	同心円	E 区
		157		94	175	8	タタキ+ケズリ		E 区
		158		(131)	(162)	6	タタキ+ハケ目	ハケ目	E 区
		159		114	(110)	8	ケズリ	カキ目	E 区
		160		102	(204)	10			E 区
第26回	横瓶	161		50	(205)	8	ケズリ		E 区
		162		10			タタキ+ハケ目	青面波	E 区
		163		楕	(316)	8			E 区
		164		236	(190)	9	ケズリ	カキ目	E 区
		165		(202)	(243)	7	ケズリ+ハケ目	ハケ目	E 区
		166		(150)	(84)	8			E 区
		167		(234)	(151)	9	ケズリ+カキ目		E 区
		168		(211)	(162)	7	ケズリ	ハケ目	E 区
		169		153	90	123	ケズリ		E 区
		170			138	(111)	8		E 区
第27回	手捏	171	手捏	50	52	6			E 区
		172	かわらけ皿	(105)	(70)	16			E 区
		173	不明		326	(133)	13		E 区
		174		長さ	100				E 区
		175		長さ	43				E 区
		176		長さ	40	4			E 区
石器									

V まとめと考察

1 出土土器の検討

本遺跡で出土した土器群の主体は、奈良・平安時代の土師器、須恵器、赤焼土器である。赤焼土器はその定義で種々の認識があるが、本報告書では、酸化焰焼成の土器で成・整形段階においてロクロを使用したと認められるものは赤焼土器として扱った。前章で実測図化し得た資料に限定されるが、土師器（II）の器種には供膳形態（A類）の壺と、煮沸形態（B類）の壺がある。須恵器（II）には供膳形態（A類）に蓋、有台・無台壺、皿、貯蔵形態（C類）に壺、甕、鉢、横瓶の各器種がある。供膳形態は、ロクロからの切離手法の差異でヘラ切り（1）と糸切り（2）に分類され、さらに底部切り離し後の削りやナデによる再調整の有無から細分が可能である。赤焼土器（III）には供膳形態（A類）に皿と、煮沸形態（B類）に壺、甕、鉢（小形甕）の各器種がある。

器体内から出土する土器は須恵器のみで、製品の遺存はなく、焼き台として再利用された壺や甕（II C類）片とヘラ切りの有台・無台壺（II A類1）で組成される。

遺構単位で一括的な資料が得られた竪穴住居跡群出土の土器は、I A・I B、II A・II C、III B の各類で組成され、その特徴は以下のようにまとめられる。①須恵器の供膳形態は全てヘラ切り離しである。②須恵器に焼き垂むものや窓壁塊を付着するものがある。③赤焼土器は煮沸形態の甕・鉢（小形甕）だけで、供膳形態はない。④赤焼土器の甕にタタキの痕跡がなく、ハケ目や削りという土師器製作と同様の調整技法が施される。すなわち、成・整形技法において須恵器製作の技術的系譜を踏むものであるが、調整にあたっては土師器製作の伝統を反映していると言えるものである。ただ④については、タタキ整形後にロクロ→ハケ目・削りの順で調整が施されたとすれば、タタキの痕跡が消されてしまう例もあり、本来的にタタキの技法を用いなかったのは問題となるところである。

天地返しの攪乱状態であるE調査区から出土する土器は、I B、II A・II C、III B の各類で組成される。須恵器の供膳形態（II A類）は、切離手法の相異で一括し二群に大別できる。すなわち、ヘラ切り離しの土器群（第1群）と、糸切り離しの土器群（第2群）である。第1群（II A類1）は窓跡や住居跡出土のそれらと器形・法量的に同類であると認識でき、住居跡での共伴関係からこれらには I B類（甕）が伴う。第2群（II A類2）の壺（a）と高台壺（b）では、器高および法量が明らかに異なるため分類が可能である。II C類（甕・甕・鉢・瓶）およびIII B類（壺・甕・鉢）については、II A類との共伴関係が明確でないながら、形態的に古相を呈する須恵器の甕を第1群に共伴させ、赤焼土器の甕とタタキが認められる須恵器の甕はこれらに後続すると考えられる。

山形盆地内のこれまでの研究成果から、これら遺跡を代表する土器群に与えられる年代は次のとおりである。6軒の竪穴住居跡の土器は、組成や器形の差異から多少の時期差はあると見られるものの、四半世紀を越えるような相異ではない。ST15出土土器は底部全面に削り調整を施す須恵器壺（102）との共伴から、8世紀第3四半期に当たることができるが、主体を占める他の土器群は河北町不動木遺跡S D 1出土土器群（長橋1986）、山形市境田B遺跡第1群土器（渋谷・黒坂1987）に類似すること、さらに前述①・③の理由を

加味してその年代を8世紀第4四半期と捉えて大過なかろう。E区の第1群土器もこれに併行すると見て矛盾はなく、体部下半に削りを伴う須恵器坏(125)や陵榜的な高台坏(138)など、住居跡同様、一部の土器が時期をやや遅くすると考えられる。窯跡出土土器は須恵器廢片が打圧調整のタタキ・アテ痕を明瞭に残すことから、これとE区のII CおよびIII B類窯を併行させ、住居跡群の主体的土器にやや後出する8世紀末葉から9世紀初頭に当てはめたい。E区の第2群土器はこれらに一部が共存し、中山町達磨寺遺跡A群土器(佐藤・渋谷1986)や境田B遺跡第2群土器に近い、9世紀前半に位置付けられよう。

2 遺跡の性格と変遷

当該地に最も早く遺構を築いたのは縄文人であった。低位段丘湿地帯の丘陵地に獣道の痕跡を発見した彼らは、狩猟のためこれに沿って陥穴を構築したと考えられる。從来「陥穴」では、出土遺物が皆無か極めて少ないので特徴的ようになっているが、本陥穴群も例外ではなく、1基の堆積土中からわずか1点のフレークが出土したのみである。しかし、調査区内からは狩猟に関連する石錐(包含層出土)や石匙(河川跡出土)が見つかっており、また、S T11出土の縄文土器片(51~53)はこれらに付随するものと推定される。したがって、陥穴群を概ね縄文時代後期~晚期の所産と捉えておきたい。平野山周辺で当該期の遺跡は、高松I~III遺跡、富沢I・II遺跡などが確認されており、その性格はまだ把握されていないが、これらを居住域とした縄文人たちが鹿や猪の対象獸を捕えていたことは想像に難くない。

その後、律令体制下の8世紀後半、当該地域では豊富な粘土・水・燃料に恵まれ、適度な斜面を利用して窯業による須恵器生産が開始される。段丘平坦部に分布する堅穴住居跡群は、ロクロビットの存在こそ確認できなかったものの覆土中に粘土塊を混入するなど、工房址と断定して間違いかろう。6軒の住居跡は、規模やカマドの有無に相異が見られ、同時存在していたとは言い難いところがあり、出土土器の検討よりS T15→S T14→S T12→S T11・13という順に廃絶したと推測される。しかし、切り合がなく主軸方向も同じになることや出土土器の類似性から、各々が機能していた時期の重複は充分に考えられることである。8世紀末葉~9世紀初頭と位置付けたSQ 1・2窯跡に付隨すると思われる工房址は、ここではS T11またはS T13堅穴住居跡と予測できるが、調査区外の平坦地にはこの他にも工房跡が存在したであろうし、またSQ 2よりも時期的に遅る窯跡が存在した可能性は高い。したがって、当該時期における遺跡の性格は、窯業を基本とした生産集落跡と結論付けられる。

引用・参考文献

- 松倉亮吉・伊藤 恭:『平野山古窯跡群―山形県における古代窯業遺跡の研究―』 寒河江市教育委員会 1970年
中村 浩:『考古学ライブラリー 13 窯業遺跡入門』 ニュー・サイエンス社 1982年
茨木光裕:『上山市久保手窯跡発掘調査報告書』 上山市埋蔵文化財調査報告書第3号 1983年
東野裕彦:『茂庭I「考察・まとめ―沼原・猪山地区の層位関係と土壤・土壤群について―』 P.518~539 仙台市文化財調査報告書第45号 1983年
宇野修平 他:『平野山窯跡第14地点発掘調査報告書』 寒河江市埋蔵文化財調査報告書第3号 1984年
武谷孝雄:『境田C・D遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第76号 1984年
長崎 至:『不動大遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第100号 1988年
佐藤正敬・渋谷孝雄:『達磨寺遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第104号 1987年
渡谷孝雄・黒坂義人:『境田B遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第111号 1987年
川崎利夫・茨木光裕:『玉虫沼第1号窯跡発掘調査報告書』 山辺町埋蔵文化財調査報告書第1集 1989年
鍋島敬一:『日本の陶器―古代・中世・1土器類 稲葉編』 中央公論社 1990年
名和道則 他:『山谷新田遺跡 山形県猪苗代窯業調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第170号 1991年
藤根 久:『平野山古窯跡群第12地点遺跡における考古学地質年代推定報告書』 株式会社パレオ・ラボ 1991年

図 版



遺跡遠景（南から）



史蹟標柱（昭和2年建立）



遺跡近景（東から）



重機械表土剥離（西から）



C区遺構検出状況（南西から）



C区遺構完掘状況（南西から）



A区遺構完掘状況（南西から）



B区遺構検出状況（南西から）



D区東半部遺構完掘状況（北東から）



D区西半部遺構完掘状況（南から）



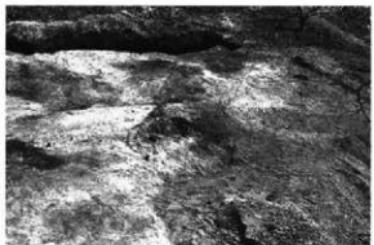
E区遺構検出状況（北東から）



F区河川跡掘り下げ状況（北西から）



C区調査風景（北から）



SQ I + 2 棟出状況（南西から）



SQ I 縦ベルト土層断面（東から）



SQ I + 2 重複検出状況（東から）



SQ I 焚口部（東から）



SQ I 遺物出土状況（東から）



SQ I 焼成～煙道部（東から）

SQ I + 2 窯跡



SQ I 窯底部（南西から）



SQ I 完掘状況（東から）



SQ I + 2 完掘状況（東から）



SQ 3 完掘状況（東から）

SQ I + 2 + 3 窯跡



遺物出土状況（南東から）



RP I - 8 出土状況（東から）



床面検出状況（南東から）



EK I 土層断面（南西から）



カマド遺物出土状況（南東から）



カマド兜掘状況（南東から）

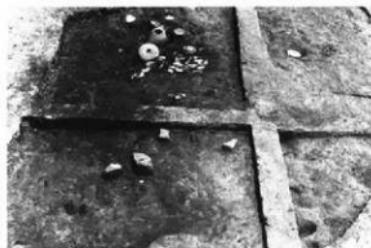


EP 2 兜掘状況（南西から）



兜掘状況（南東から）

STII 竪穴住居跡



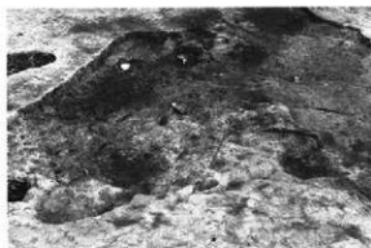
遺物出土状況（南西から）



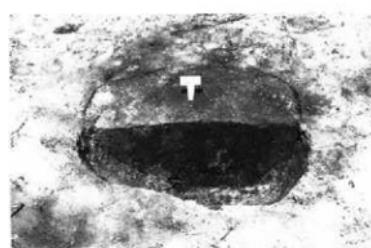
RP21～25出土状況（北東から）



RP25・33出土状況（南西から）



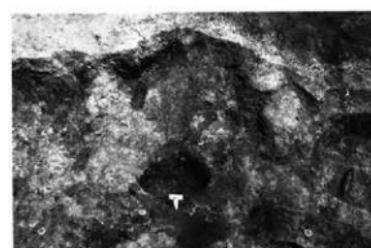
床面検出状況（南西から）



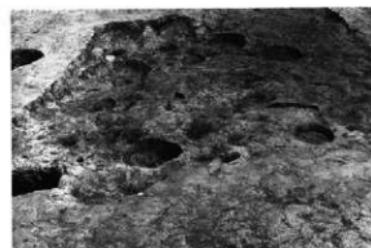
EF 1 土層断面（南東から）



EP 4 土層断面（南東から）



カマド発掘状況（南西から）



発掘状況（南西から）

ST12 壺穴住居跡



プラン検出状況（北西から）



遺物出土状況（南西から）



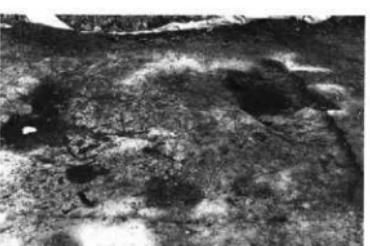
RP38・39出土状況（南西から）



RP40出土状況（東から）



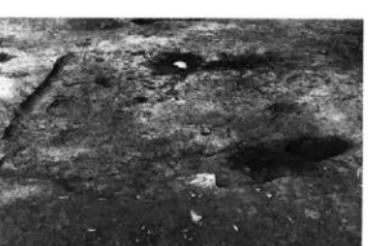
RP41～43出土状況（南東から）



床面検出状況（西から）



EP I 土層断面（北西から）



柱穴発掘状況（南西から）

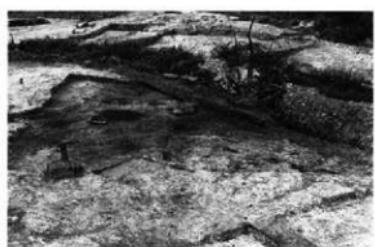
ST13 竪穴住居跡



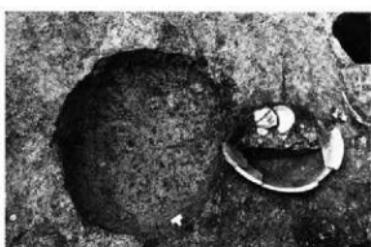
遺物出土状況（南東から）



RP45~48出土状況（南東から）



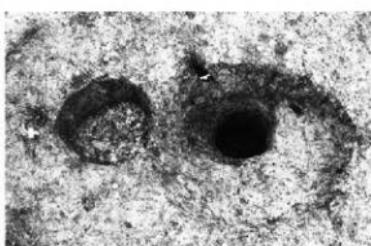
床面検出状況（北東から）



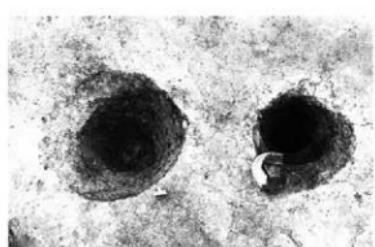
EK 1 完壠、EK 2 土器出土状況（南から）



EK 4 土器出土状況（南東から）



EP 1・2 完壠状況（西から）



EP 7・8 完壠状況（東から）



完壠状況（北東から）

ST14 壺穴住居跡



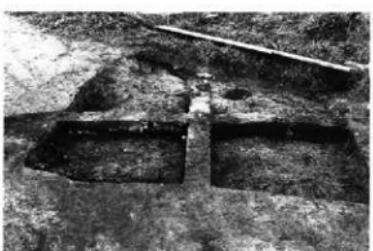
東側遺物出土状況（北西から）



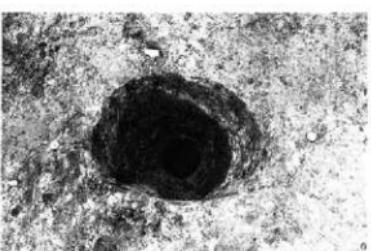
西側遺物出土状況（北西から）



東側プラン検出状況（西から）



土層断面（東から）



EP I 完掘状況（南から）

ST15 竪穴住居跡



ST15完掘状況（北西から）



ST15カマド煙道部土層断面（北東から）



ST15カマド内土器出土状況（北西から）



ST16完掘状況（南東から）



ST16遺物出土状況（北東から）

ST15・16 壺穴住居跡



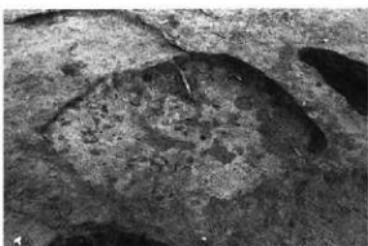
SK51完掘状況（東から）



SK52半掘状況（南から）



SK54遺物出土状況（南西から）



SK54完掘状況（南東から）



SK56完掘状況（南西から）



SK59完掘状況（西から）



SK64完掘状況（北東から）



SK65完掘状況（北東から）



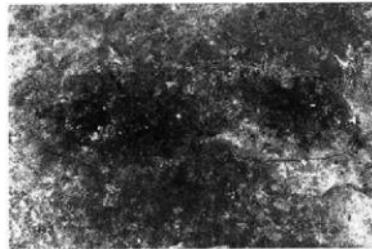
SK67土層断面（南西から）



SK67・68土器出土状況（西から）



C区陷穴群検出状況（北東から）



SK46プラン検出状況（南から）



SK46土層断面（南東から）



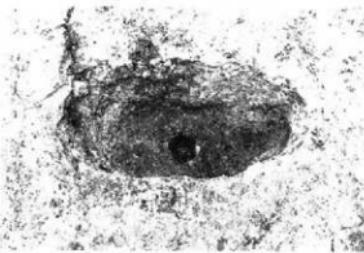
SK46底部ピット検出状況（北東から）



SK46兜状況（北東から）



SK26土層断面（東から）



SK71土層断面（西から）



SK26完掘状況（南から）



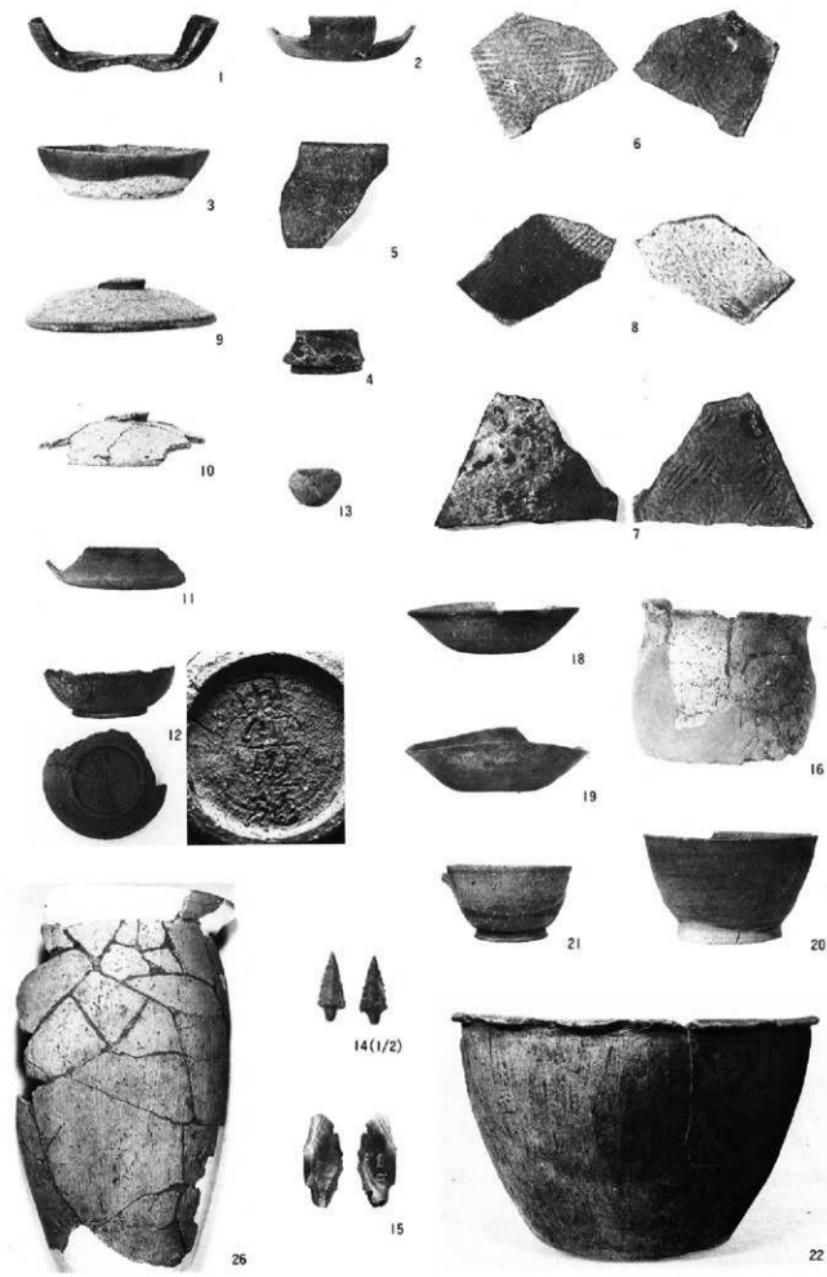
C区隙穴群完掘状況（北東から）



B区落ち込み土層断面（東から）



F区河川跡土層断面（南西から）



図版16



出土遺物(2)



49



50



51

52

53



54



55



56



57



58



59



60



6

圖版18



62



64



65



66



67



63



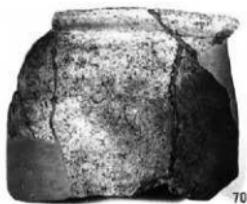
68



75



69



70



76



77



71



73



72



78



79



80



83



81



82



出土遺物(4)





94



92



95



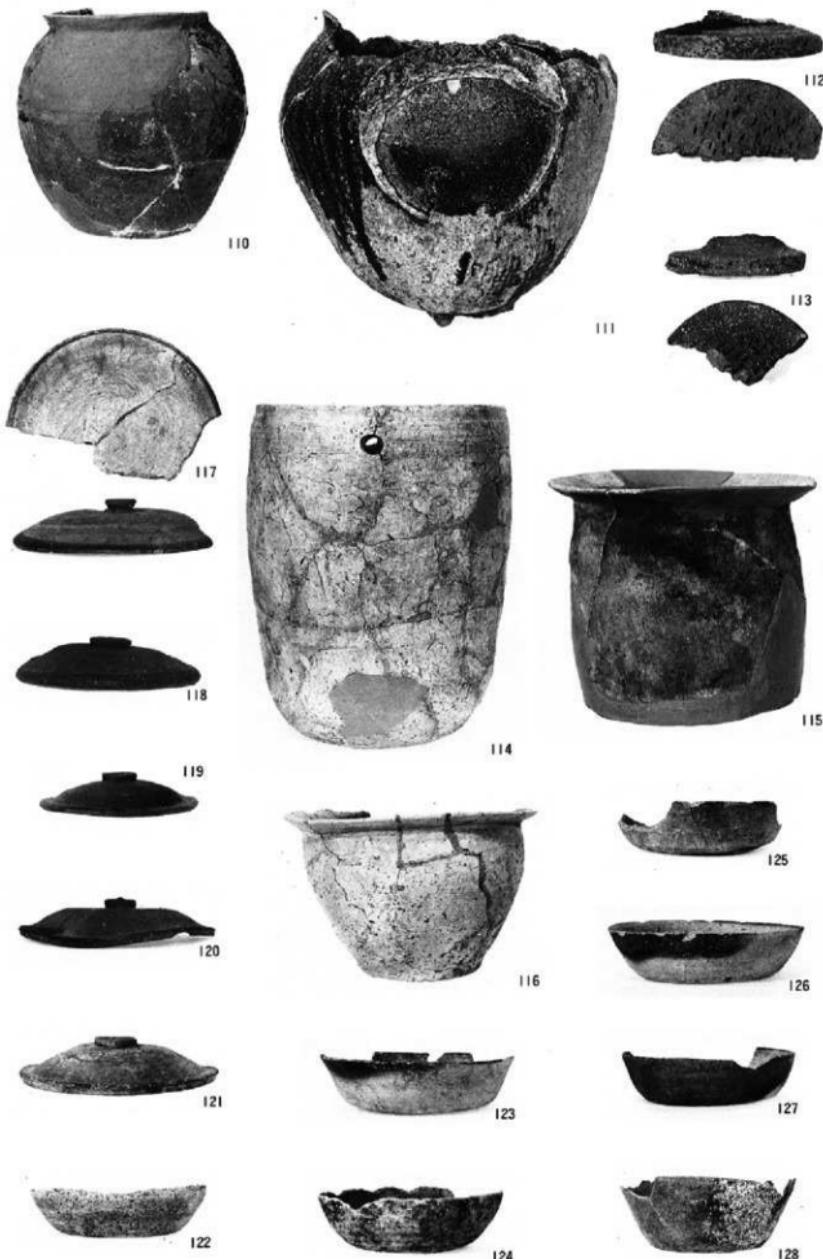
96



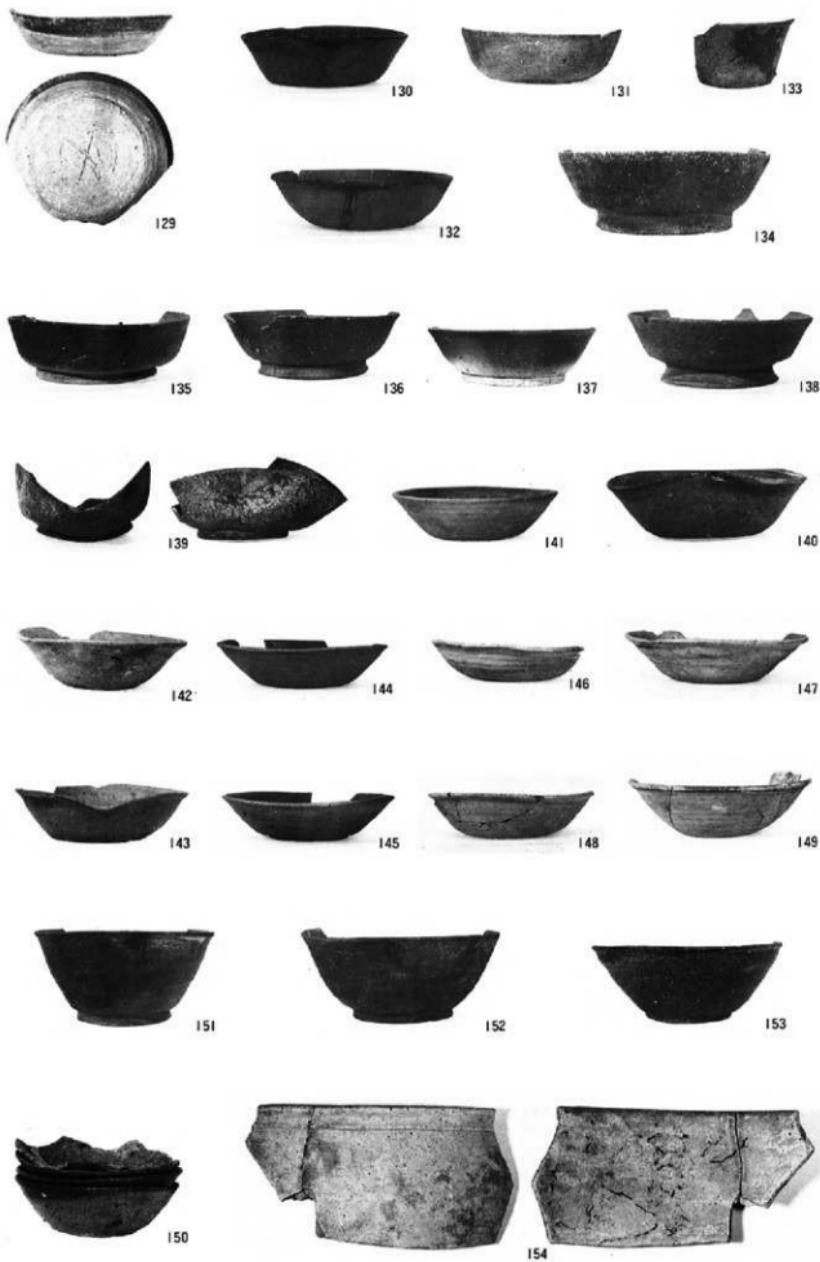
97



98



図版22



出土遺物(8)



155



156



157



158



159



160



161



162



163



166



164



173



165



169



168



171



177



170



172



174



175

山形県埋蔵文化財調査報告書第178集

ひら の やま
平野山古窯跡群第12地点遺跡

発掘調査報告書

平成4年3月25日発行

発行 山形県教育委員会

印刷 山形印刷株式会社
